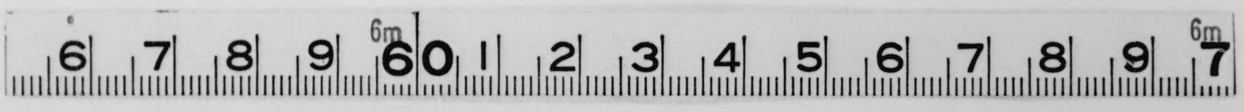
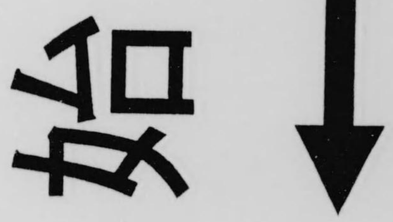
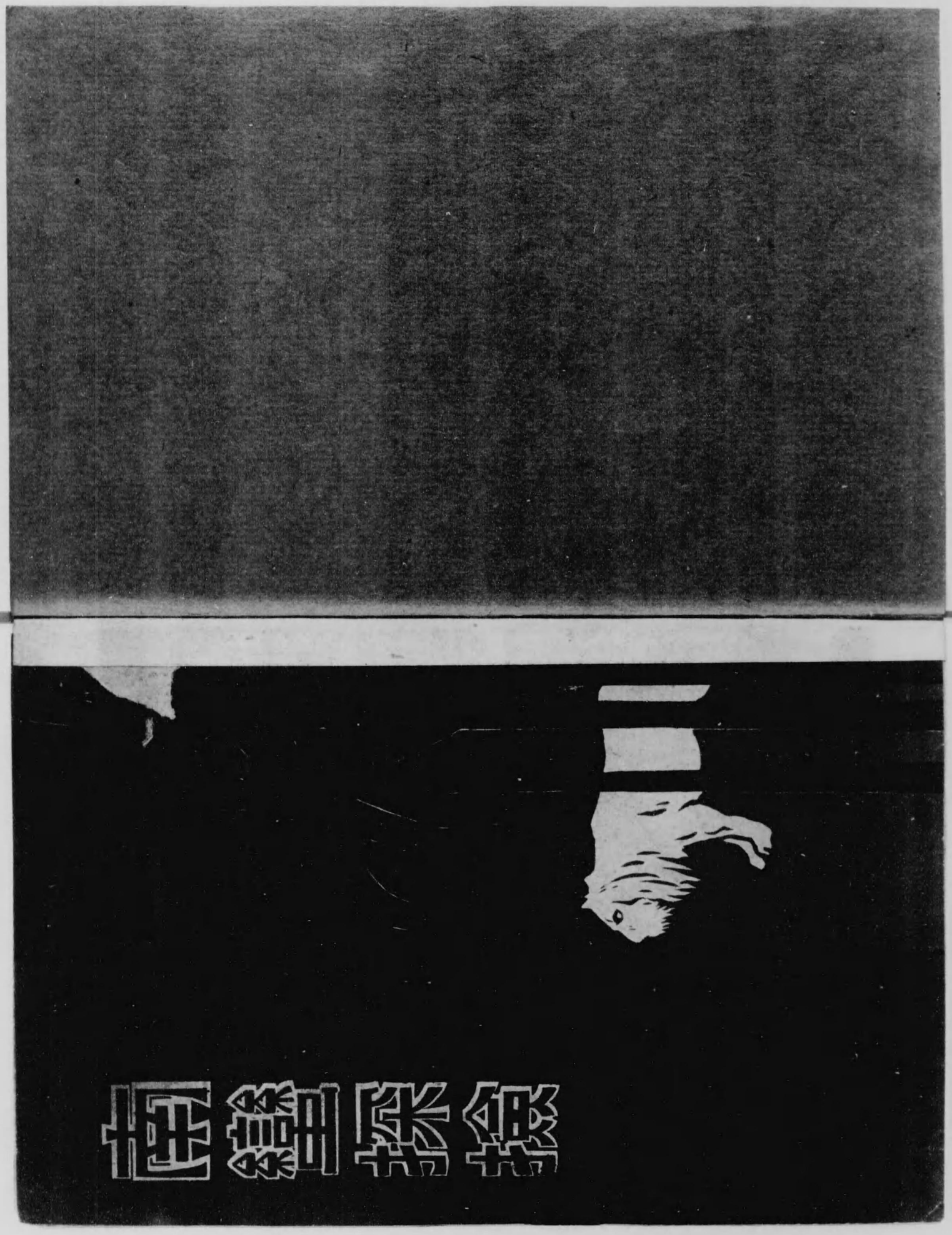
384
68
禁複写






柴湖柴俠

384-68

帝國圖書館藏

南蠻探檢

大正
8. 6. 20
内交

序

神州の正氣八紘に漲り、武烈古今を貫きて千載滅せず、德川氏大政を奉還して且五十年、皇威炳乎として日星の如く、蒼生齊しく榮光を欣仰して鼓腹擊壤す、嘻泰平の世なる哉。

遮莫近年我が國民中漸く思想の廢頽動搖を來せると武士的精神の缺除せる者あるは洵に慨く可く且つ憂ふ可し、殊に近時拜金的思

想の國内に瀰蔓するあり、就中海外に航する
の輩多くほとんどれが渇仰者たり、從つて彼等は
眼中國家在るなく、念頭更に節義を辨ぜず、或
は僅々千萬の黄白に代へて祖國の平和を賣
らむとし、或は自ら節義を售つて單り富貴に
飽かんとす。

此の時に際して畏友西川虚空陀あり、憂國慨
世の志を述ぶるに天性の雄渾と壯麗の文を
以てし、以て南蠻探檢の一書を著す、此は汚濁
せる國民思想に向つて洵に一味の清涼劑た
るのみならず、彼等拜金の徒輩に對する警醒
の熱鐵鞭たり、而して本書は表面蠻界の探檢
記なるが如しと雖も、其の内面に秘めたる寓
意たるや洵に深重にして言々句々一として
君が熱誠なる愛國の至情に發せざる莫し。
君や柔劍禪の至道に依つて心膽を錬る事多
年、乃ち雄心壮略能く生死の境に在りて悠々
談笑す、併も邦家の安危に關しては寤寐猶安

んせず誠に恬々閑々たるあり、
交友爰に六年、予と君が互に断金の誼を捨て
ざるの所以は此共鳴に存す
勇俠の友よ、囚はれたる世界民族の開發と邦
家長久の安泰を期する上に於て、共に與に萬
死を鴻毛に比せん故
一言以て南繭探撿の序と爲す

大正八年六月朔日

徳川守

南蠻山中に於ける著者

馬來土人に變裝せる德川守氏

自序

征獨の大詔煥發せらるゝや、予即ち某社の命を承り、戰時通信特派員として海外に赴く。爾來筆を載せて船駛馬走する事二年有半歲、這間南蠻の各地を巡つて到る處自ら性來の蠻癖を發揮す。

本書は則ち這間に於ける予が蠻行の記錄にして、歸朝後東京朝日新聞社に入るに際し、從前各新聞及び雜誌に掲載せる所の物を輯めて一本とせるもの。這中或は彊場に伏

して、彈雨を浴びつゝ纔かに筆を遣り、或は深夜蠻界の草萊中に在りて、燈光求むるに由無く、月下辛うじて記し得たるものあり。從つて文辭甚しく彬賦に缺除し、且つ篇中時に重輻孟浪の點莫きにしも非ず、讀者請ふ之を諒焉。

因に本書記する所、多くは蠻界の常套些事に過ぎざるも這間邦家の前途と、彼地民族の意向に鑑る所あり、乃ち冥々之を寓して以て我が廟堂に愬へ、且つ有司に向つて詢らんとす。

而して萬一本書にして、我が國建國以來傳承し來れる忠君愛國思想の振興と、一般青年に對し、剛健の氣風を皷吹するの一助ともならば、予の幸之に過ぎず、他あらんや他なし。

大正八年六月

東京朝日新聞編輯局に於て

虛空陀　西川甲平

最後に本書上梓に對し多大の後援助力を與へられたる同業各社の知友諸先輩に深謝す。

目次

第一

勇士揃ひの鰐魚狩……一
志士の夜會と德川君……一
噫呼金州丸の亡命將校……三
猛獸の唸び……六
野獸と虎と鰐の群……八
月下の猛虎……一〇
危機一發……一三
德川君の蠻勇……一四
咆哮と銃聲……一六
愈々危險地帶……一八

目次

蠻界の進軍歌……二〇
南國の森林美……二一
獨木舟中の冒險……二三
酋長の家……二五
土民の歡迎……二七
毒草を嚙みて……二八
娘の哀話……三〇
馬來式の饗應……三二
我が劒を受くべし……三四
有色同盟……三五
日本は英國番犬……三七
鰐の棲む碧潭へ……三九

目次

群猿啾々……四一
怖ろしい黑蟒……四二
森の惡魔の殘虐……四四
日本男兒也……四五
大蛇と毒蛇……四七
大蛇の襲擊法……四九
蠻勇ローマンス……五〇
孤猿と黑蟒……五二
巨口の犧牲……五四
大雷雨……五五
難破の準備……五七
鰐が浮いた！……五九

目次

戀の病療養所……六一
月下の鰐群……六三
進退谷まる……六四
決死の蠻行……六六
爆破作業……六八
從者の脫走……七〇
千番に一番……七二
裂帛の悲鳴……七三
武裝の護衛……七六
虎群襲來……七七
猛虎一聲山月高……七九
山雞の歌……八一

目次

再生再生……八二
水上の怪影……八四
亂射亂擊……八五
水底の唸聲……八七
掉尾の一振……八九
哀れの犧牲……九〇
友の弔ひ……九二
生死一如……九四
天任に任せて！……九五
人喰人種……九七
猩々と犀と……九八
怪漢の誰何……九九

目次

獅子の猛威……一〇一
爆彈の炸裂……一〇三
黑豹の咆哮……一〇四
殘月の一曲……一〇六
忠犬の血戰……一〇七
ヒマラヤまでも……一〇九
憂國の海賊……一一〇
大虐殺……一一一
日本人塵殺の檄文……一一三
日本義勇軍出動……一一五
白禍論沸騰……一一六
市中の戒嚴令……一一八

目次

印度の老志士……一二〇
英人の狼狽……一二二
警戒線突破……一二四
神の如き人……一二五
激戰中の會見……一二六
刺客防衛策……一二八
美少女の案内……一三〇
志士の搖籃……一三一
卓上の無線電信機……一三三
秘密室の構造……一三四
婦人革命家……一三六
老翁の天女……一三七

目次

英國の統印策……一三九
血書の遺書……一四〇
密書の傳達……一四一
最後の握手……一四三
サラバ東海の友よ……一四五

第二

馬來半島の虎狩……一四七
怖ろしき一夜……一四七
閃電霹靂……一四九
屋外の騒亂……一五〇
馬鹿野郎……一五三
ロバート博士の危難……一五四

決死の護衛……一五五
鮮血腥し……一五七
ロンリースキート……一五九
日本刀……一六一
猛虎と猛犬の格闘……一六三

第三

印度の獅子狩……一六六
異郷の友より……一六六
エムデンの暴行……一六九
奇遇……一七一
悲痛なる村謠……一七四
計畫成る！……一七七

巨象『火の神』……一八一
森の怪火……一八五
猛獅現はる……一八九
可愛い仔獅子……一九三
蠻域に日章旗……一九四
エムデンの追窮……一九七
象の野營作業……一九八
森林中の塹壕……二〇一
大事出來……二〇三
決死の探水……二〇四
猛獸の巣窟……二〇七
猛獅出現……二〇九

弔ひの銃聲……二一三
第四 最後の冒險野象狩……二一六
日本に歸らぬ決心……二一六
群象の出沒……二一八
吉井大尉を總帥に……二二一
孔雀の聲大蛇の跡……二二四
茶褐色の怪物……二二七
一齊射擊……二三一
第五 印度革命哀話……二三五
銃殺の卷……二三五

目次

陰謀の巻……二四八
附錄 遠州灘鰹漁探撿記……二五六
序言……二五六
發端……二五七
耳を劈く怒濤の音……二六〇
難破の際の用意……二六二
命懸けの一番乘り……二六三
三十餘名の阿羅漢……二六五
巨濤の中……二六九
怪魚の群れ……二七三
鮪だッ鮪だッ……二七六

鯨群來る!!……二八二
大漁!! 大漁!!……二八五
暴風雨……二八八

目次畢

南蠻探檢

西川虛空陀著

第一　勇士揃ひの鰐魚狩

◇志士の夜會と德川君◇

砲煙彈雨を冒し、瘴煙蠻霧を排して、生死の境に出入すること幾歳月。漸く任期滿ちて歸朝の途には就いたが、さて船が新嘉坡に着いて、日本へももう三千哩、戰時とは言ひ乍ら、海上の危險は更に無く、半月經てば故郷の山が見られるのである。

恁う思ふと日本が既う目の前に見えるやうで、歸心は却つて薄らいで行く。能ふ

ぺくんば、更に一二年間外國に居て見たい。……イユーロップホテルの三階で一人そこはかとなく考へて居たら、突然電話がかゝつて來た。電話はマルセーユから桑港に赴く同船の客で、Pと言ふ印度の豪商である。豪商ではあるが、一向商人らしい所もなく、船中の誰彼を合手にしては切りに印度獨立論を提唱する男で、極めて痛快な人物、それが今宵新嘉坡郊外の某所で、同國の富豪にして志士たる、A氏別邸で夜會があるから、臨席して呉れと言ふのである。

それで早速承知の旨を答へて出席したのであつたが、夜會の模樣は一切秘密たるべき誓約があるから此處には記さない。さてその夜の歸途同邸から送りの自働車を着けたのが、さる佛蘭西の美人が經營せる、ミッドルロードのバーである。强烈なアブサンの匂ひや、華やかな男女のコーラスに伴れて、奥では今しも舞踏の眞最中僕此處でゆくりなくも德川守君に會つた。そして話合つて見ると、君は德川飛行大尉の令弟で、豫備砲兵少尉だと言ふ。僕も內地では暫く飛行記者を勤めてゐたので

御令兄とは滿更知らぬ仲ぢやない。お互に三千哩外の異鄕で會ふのも、何かの深い因緣だ。一つ之を機會に何か破天荒な痛快な事を遣つて見やうぢやないかと言ふ。序に言つて置くが、德川少尉は是から滋野男爵の後を追うて佛蘭西に渡り、獨軍の頭上に飛行機を飛ばさうと言ふのである。

それではお互の運試し膽試しに、ヂョホールリヴアーで鰐狩を遣らかさうと言ふ事になつた。恁くて其の夜の中に急ぎ遠征の準備を調へ、まづ同君の義兄たる吉井子爵令弟から特別大口徑の猛獸狩專用自働モーゼル銃を借用し、更に各自が連發の拳銃を用意する。それから從來猛獸狩に經驗のあると言ふ。馬來土人三名を雇ひ入れ、彼等にはバランと稱せらるゝ青龍刀めきたる馬來刀を携帶せしめる。

◇噫呼金刺丸の亡命將校◇

恁うして萬端の準備を調へ、その翌日早朝新嘉坡埠頭から百噸ばかりの小蒸汽船

で乘り出した。眺むればリオの島々は朧ろに煙り、埠頭の彼方獅子島の龍王樹は槎枒として銀霧の中に仄見ゆる。

恁くて駛ること約五時間、船は早くも鰐の棲むてふチョホールの河口に近づいた。是より上流數十哩にかけては、兩岸共に欝々たる護謨林で、就中日英兩國人の栽培地が多い。而して河口に方つてテッコンと呼ばるゝ島が横はる。島は全島椰子を以て掩はれ、自ら河口一段の景致を添えてゐる。その對岸は即ち某日本人のイステートであつて、數年前同地の英政府徴用紙は『日本人の陰謀』と題し、日本は將來同地に砲臺を築造き、以て新嘉坡を砲擊すべく、目下密々畫策中なりとの虚報を傳へた。そこで時の總督アーサーヤング卿の驚愕一方ならず、連りに密偵を走せて内情を探つたと言ふ、爾く問題となつた地點だけに同地附近通航の船中、屢々此噂をされると云ふ、成程見遣れば、新嘉坡の島影は手に取る如く、渚邊に茂る椰子の林も鬱鬱として眼前に横はる。而して呼はゞ應へん、タンヂョンカトンの郊外から、シ

ーヴユーホテルの邊りも分明に認めらるゝ。

是より遡江更に一兩時間、河とは言へど、さすが大陸に連る一大半島を貫流せる大河、汪洋として海の如く廣いのである。

恁くて有名なる鰐の棲息地バンチョール村落に上陸したのは、その日の午過であつた。

僕は此處で德川君から、日本の某退役將校に紹介せられた、名前は爰に記すまでもない。彼の日露戰役の當時、例の運送船金州丸事件で以て、氣の毒な惡名を謠はれた人であつて、今尚世人の記憶に殘つてゐる人である。同君は爾來祖國を去つて爰に殆んど亡命に等しき生を送りつゝある。自ら慚づるか、或は人之を許さゞるか新嘉坡には日本人會もあつて多數の同胞が在留してゐるが、同君は如何なる會合にも一向顔出しをせぬさうである。諺に所謂『官に仕ふる事百日、失一朝にあり』で恁る悲哀は軍人のみではない、サラリーマンとしての僕は同じ共鳴を感せざるを得

なかつた。嗟呼南蠻山中の亡命同胞！。

◇猛獸の嘯び◇

三千哩外南蠻の一荒村！

爰に端なくも同胞三名が相會して隔意無く日本語で語り合ふ。既にこれ奇しき因緣ではないか。然も三名は何れも數奇なる運命の飜弄兒である。一は征露の役に不忠の名を謳はれて今は見る影もなく異鄕の空に死を待つ人、一は伯爵、然も德川家の若殿としてあるべきが、故あつて祖國を去り、遠く佛國の戰線に走つて飛行機上の人たらんとする人、一は即ち禿びて殘れる一管の筆端に二束三文の露命を繋がんとする冒險記者、誰か此際尋常一片の挨拶にのみ別れ得るものぞ、乃ち我が鰐狩の一行は此の夜右亡命將校のバンガローに一泊する事となつた。

家は馬來式と洋風の折衷式で、濕氣と猛獸の來襲を防ぐ爲めに一間ばかり座を上

げて作られた、そして屋根は椰子の葉葺の極めてお粗末なものである。勿論客間らしいものゝあらう筈なく、板で圍うた十疊位の西洋間に、鐵製のベッドが横たはり、座敷の中央には南洋名物の大理石の圓卓が置かれてあつた。乃ちヴェランダに立つて眺むれば、前面は漫々たるヂョホール河の流れであつて、裏手は矗々として天を摩せる椰子の鬱林を透して近く土人の漁家が二三軒、

『淋しいでせうな、好く這麼處で生きて居られますな。』

記者が何心なく恁う訊くと、主人の顏には見る／＼暗愁の色が浮んで來た。成程これは言ふ事でなかつた。金州丸事件以來一切世を避けて居る人に對し、その昔を追想せしめる樣な話は禁物である。同じ事件で祖國から捨てられた鷲特務曹長や、前年當地で虎と格闘して危く生き殘つた椎名大尉の話も聞きたかつたけれども、何分主人は多年此の山中に住み乍ら、日本人の會合には一切顏を出さぬと云ふ人、武士道の手前それほど世に耻ぢて居る人に對しては、敢て聞くのも餘りに氣の毒であ

る。

話は一轉して主人が經營しつゝある護謨林の栽培苦心談や、やがては猛獸狩の實驗談となつた。

土人製の芭蕉酒やウキスキーの盃を擧げつゝ主人は語る。

◇野象と虎と鰐の群◇

此邊一帶にかけて最も人畜に危害を逞しうしつゝあるのは野象と虎と鰐の群であるが、虎と鰐は夜分出て來て犬や鷄を捕つて行く位な事で、人間は要心さへすれば害せらるゝ心配は無い。尤も夜間の交通は勿論、日が暮れてからは隣へ行くのも危險である。そして最も厄介なのが象であつて彼等は時々深林の奥から一族擧つて護謨園に殺到する、そして一本十弗位費つたゴムの生木を片ッ端から根引にする。然も一夜の中に五六百本から千本位遣つつけるので損害は莫大なものである。それ

で何故にそんないたづらをするかと云ふ事は未だに判明しない。或は彼の巨體を運ぶに際して、通行の障害物として拔去るのか、さては其の根皮を食料とする爲めか何とも答へずに遠慮なく暴れ廻る、而してこれが驅逐策に就ては各國の栽培業者が切りに研究して居るが迚も小銃や彈藥では感應がない。先年はヂョホール王が特に軍隊を繰り出したが、矢張駄目であつた。あの巨體であるから小銃彈の三つや四つ飛込んでも平氣で居る、と云つて走るには風の如く疾いから擊ち損ずれば人間の五人や十人は即座に踏み殺す……

猛獸談に夜は更けて、月は今前面の江上に昇つた。折柄裏手の林中に方つて林を搖がし地を震ふ樣な猛獸の叫びが聞えた。

虎か、象か、豹か？

主人は『來たな』と言つた。そして雙眼鏡を執つて窓を密と開けた。

『靜に御覽なさい』と云ふ。

霧は千古の深林を韞んで、天地は深い沈默に落ちた。

◇月下の猛虎◇

天地蒼茫として夜は深沈たり、滿山風死して月は靜かに蠻界の空に照る。鰐の棲む大江の滸、虎伏す千古の森林に、奇なる遭遇を悅ぶ三人の同胞が、互に胸を悸らして聞きつ語りつせる猛獸談の眞最中、今眼前にその咆哮と跳躍に接せんとは、豫て期したる事ながら僕は今更に驚いた。亡命士官の命ずるまゝに、僕と德川君は靜かに雙眼鏡を構へて窓に立つた。月光を透して蔚林を物色すれば、成る程眼前數十ヤードの彼方に、婆娑たる椰子の樹影を踏んで匍匐せる巨獸の姿が見ゆる。

『毎晩此の通りです。虎が來れば象が來る、象が來れば虎が來る、餘り好い氣持もしませんが、此の頃は大分馴れました。』

亡命子は微笑を含みつゝ恁く呟く。

『これは虎のやうですネ』

と僕が言ふ。

『無論虎です』と德川氏が應へた。應へながらも早此の人はモーゼルを右手に掴んで居た。

『千載一遇だ、一發やつて見ませう』

と言ふ。

『否お止しなさい、失敗つたら大變ですよ』

と老士官が制した。

『それに實を言ふと虎や豹が出てくれると有難いのです。何故と言ふに鹿や野豚が山を荒さぬから非常に結構なのです』

と說明する。但し德川少尉は銃の名手と聞く、殊に公達には珍しい蠻骨を備へた人佛軍の飛行機上から獨軍の頭上に爆彈の洗禮を與へんとする人、迚も老士官の制止

は諾かなかつた。土人の從者を呼んで、倉皇馬來刀を腰に帶びると同時に、突然一方の扉を開けてヴエランダに飛出した。

『こんな好機會はありません、貴君もどうです御一緒にやつて見ませんか』

◇危　機　一　發◇

御親切に、御勸誘は深謝するが實を申すと中學時代に發火演習と云ふ兵隊の眞似事はやつたが、爾來鐵砲彈　飛出す銃は持つた事なし、乃ち好意を謝して僕は即座に豫備役を承つた。

少尉は階段を降りて忍び足に五六歩進んだ、そして一本老いし護謨の立木を楯にとつて銃の照尺を量つて居る。

『危險いッ』

と老士官は呟いたが自らも銃を構へて德川君の後背を護衛する。恁くて標的は定め

られた。四邊は森として呼吸する音さへも聞ゆるくらゐ、今や冒險極る一發の銃聲が、吾等の耳朶を劈かんとせるの一刹那、件の巨獸は一聲凄じき唸りを發すると共に、猛然として躍り上つた、と德川君は銃を構へたまゝピッタリと大地に匍匐つた言ふまでもなく虎の襲擊に備へたのである。僕はアッと言ひ乍ら、暫くは呼吸の根も止つたくらゐ、人の身にかゝる危險とは言ひながら、目前一髮の危機に臨んでは迚も他事とは思はれない、此時老士官は銃を掴んで矢の如く露臺に飛出した。

然し虎の目的は違つて居た。彼は一聲猛ると共に颯とばかり鬱林を驅け拔けて更に十數ヤードの彼方なる護謨の疎林に突進した。夫と共に早や斷末魔なる鹿の悲鳴が斷續して起る、同時に吽と許り虎の唸りが聞えた。

此時僕は初めて虎の姿を如實に認めた。彼が月光を浴びて矢の如く疎林に跳んだ刹那、雙眼鏡裡分明に其の姿を見た。そして從來物の本や繪畫に現れた猛虎の跳躍が全く想像と空想によつて描かれたものと承知した。

◇徳川君の蠻勇◇

吽と響く虎の唸と斷末魔なる鹿の悲鳴は刻々遠く森の樹下暗に消えて行く。月は縹渺として打ち煙りたる江上に照り、下界は今や幽暗の靄に包まれて杜も林も一樣に朧である。徳川少尉は彼の憐れなる犧牲の悲鳴を目當に躍然として突進した。

『徳川さん危險い、虎は一頭だけぢやない、親仔連れかも知れないからお止しなさい。』

恁く云ふ老士官の言葉の尙訖らぬ中に轟然たる一發の銃聲は物凄く闇の深林に谺して響いた。續いて又一發、二發、三發。

恁くてその第五發目が切つて放たれた刹那又もや物凄き猛虎の咆哮が起つた。と

『呀、放した、獲物を放したな』

と老士官は沈着いて私語いた。そして間も無く彼方に當つて氣魂しき呼子の笛が聞

えた。笛は何日も徳川君が從者のタンペを呼ぶに用ゐる。

するとタンペは横手の物置から飛ぶが如くに驅け出した。彼が右手に振翳した馬來刀は明晃々として、月に照つた。僕も聊か猛獸狩の經驗は有つてゐたが、今宵の事は餘りに突飛に起つたので、その經過と內情が一向に分らない。判らないから、不安である。

猛虎の咆哮と銃聲の連續との間に於ける交渉と結果は畧判ぜられぬでもない。併し『放したな』と言ふ老士官の沈着な言ひ分と、次で呼子の笛と、それから馬來刀を振翳して卒然驅出した從者のタンペと……咄嗟の間には此解釋が却々にむづかしい。

『オーイ徳川の坊ッチャーン、大丈夫かアー』

心細い聲を振絞つて恁う呼ぶと、『オーイ』と答へる。續いて何か言つて居るらしいが判らない。

◇咆哮と銃聲◇

『獲れたかアー』

と訊くと、

『オーイ』

『獲れないのかアー』

『オーイ』

『早くせぬと他の虎が又來るぞー』

『オーイ』

何處まで行つても『オーイ』一點張りで一向要領を得ない、然し德川の坊つちやんに危險の無い事は此の『オーイ』に依つて察せられる。

『早く歸つて頂戴なアー』

恁うなると最う半分冗戯である。さすがの老士官もワハ、、、と笑つた。兎角する中、前方の椰子林とヂャングルの接觸點邊りに晃ッと光るものが現はれた。そしてそれが燈臺の灯の如く時々明滅する、そして刻々に此方へと近寄つて來る。

其れはタンベが主人の背後を護りつゝ用意の懐中電燈を前後左右に廻轉しつゝ歸つて來るのであつた。聽て二人は揚々として歸つて來た。先頭に立つた德川少尉の右手にはまだ生温い鮮血に塗れた小鹿が提げられてある。

『五發目が虎公の腰に命中したらしい、そして此鹿を放してグル〳〵と四五回急速に廻轉した後、一驂に逃げました』

と語る。

德川君はそれからタンベを呼んで虎の獲物の掠奪をやらせたが此間數十間の後方から銃を擬してタンベを護衛したと云ふ。

この夜吾れ等は鹿鍋をつゝきつゝ更に一盞を傾けて、眞夜中頃に漸くベットに入

つた。

裏手では徹宵猿群の叫びが啾々として聞えた。

◇愈々危險地帶◇

翌る拂曉僕等の一行は愈々萬端の準備を調へて鰐狩遠征の首途に上つた。惜しき別を惜しみつゝ亡命老士官のバンガローを去たのが午前六時、ミルク色の朝霧が深く大江の兩岸を韜んで、川面を掠めて行く飛燕の群がスイ〳〵と辷るやうに翔ぶ。

一行は此處からヂョホール河の本流を去つて更に十數哩の支流を溯江せねばならぬ。支派と云つても底は海の如く深いのであるが、流の兩岸はマングローブと稱する熱帶樹が森々として生ひ茂り、迚も大船は入ることが出來ない。殊に此のマングローブは海中に浮城の如く簇生して陸か島かと見せしめる位に、水陸の分ちなく繁茂する。而して其の根は宛ら熊手の如く多數に分蘖して水底から五六尺、時には一二

丈も上部に達して漸く幹となる、そしてその實の外殼は恰も鎗の穗先の如く、長さ又二三尺で、尖端は重くして固く且つ鋭く、漸く實が熟すると枝を離れて槍の如く垂直に降下する、斯くして水の底深く地面に突入して更に繁殖するのであつて、船の航行を妨ぐる事甚だしい、然もその枝の繁るところ、必ず熱帶特有の毒蛇が居る色蛇が居る。但し色蛇は美しい、所有色彩の美を茲に萃めて、天なる美の神が作りしか、五色や白や紫や、さては眞紅や色さまゞの蛇が總はる、然もその牙には大抵一瞬に人を咬み殺すべき毒を有つ。

一行は亡命士官から詳細と注意を與へられ、茲にスチームボートを捨てゝ一同土人の獨木舟に搭じた。舟は千古の大木を穿ちて造られたる長さ三間餘の大型である之に食料の麵麭に罐詰、飲料水に鍋、夫から彈藥に天幕等を積んで五名勇しく漕ぎ出した。赤道近き熱帶の大氣は澄んで水の如く、東の方目路の際なる水平線上に方つて、銀白の靄が眞紅に暈されてゐるのは、今し朝暾が海に浮ばんとするところで

ある。

◇蠻界の進軍歌◇

It's a long way to Tipperary.
It's a long way to go.

凡そ英國の領土に生くるものは必ず謠はねばならぬかの如く流行せしめられた。彼のチベラクーの新軍歌はタンベの口から勇しく發せられた。而して

To the sweetest girl I know.

に至つて三人の馬來人が一同聲を張上げて合唱する。

『馬鹿野郎ッ、英國の歌でなくて日本の歌を謠へ』

と德川君が馬來語で一喝する。すると彼等は直に『チョンキナ〳〵』を歌ひ出した『チョンキナ』節は先年三浦環女史が新嘉坡の劇場で歌つて以來、在南各國人間に

大流行を極めた歌である。但し結句の『横濱神戸まで』を『ヨーコハアマ、コーベマラ』と發音するので大笑ひ。

餘談は措く。

舟は折柄の滿潮に乘じて駛るが如く遡る。漕ぐこと約一時間にして、水は全く海の色彩を離れて漫々たる濁流となつた。此邊から愈々危險地帶となるので、各自細心の注意を拂はねばならぬ。放心して鰐の晝寢を驚かすと、彼の猛惡なる尻尾の一撃を喰つて舟も人も木葉となる。その上此邊からは例のマングローブが繁茂して水路極めて狹いので、時に樹葉を搔き分けて行かねばならぬ。此時注意せぬと、樹上から毒蛇に跳び着かれる。

◇南國の森林美◇

陽は早遠く天際を離れて斜めに灼爛の熱光を射て居る。霧は散つた。露は滴つた

熱帶の大氣は彌々澄徹して萬象は燎々たる南國の色彩を現して居る。鬱々たる濃綠の深林は果しもあらず行く手に展開し、時に滿朶の火の如く赤く見ゆるは合歡の大樹に花開きたるもの、矗乎として摩天の雄姿を現せるは名果ドリアンの古木、而して樹上點々として黑影の動くは群猿の食を漁るもの、檳榔の杜や、芭蕉の葉蔭にキ、として鳴くものは栗鼠の一群、更に幽暗の樹下暗に喈々哈々として鳴くは南國一流の大蟬、飛龍である。

恁くの如くにして山河沼澤行けども〳〵變らない。成る程舟を遣りつゝ眺めて行くと此邊の樹間は一帶に蛇が多い。金紋の斑々たるもの眞紅の美しき曲線に飾られたるもの、或は紅黃紫白の直線を彩りたるもの、それが到る處の樹間五六間の高さに總はつてゐる。土人の手に捕へられて一尾幾錢の安値に賣られるが、やがて鞣皮となつて巴里の市場に現はれると驚くべき高價なものとなる。

吾人の一行は部厚きヘルメットを目深に冠り、更に土人の注意によつて赤布のサロンを頭上から肩に流した。蛇は總じて赤布を恐れるからである。恁くしてタンベは舷頭に立つて枝を分け、二人の土人は忍びやかに櫂を操りつゝ行く、而して德川君と僕とは舟の眞中に座して交互に雙眼鏡で見張をする。

◇獨木舟中の冒險◇

這中僕の最も閉口したのは、舟の中から外部に向つては一切手足を出すべからずと云ふ達しである。それは鰐の襲擊を怖るゝからである。南洋に來つて足を咬み取られたり、腕を拐ぎ去られた者は大抵小舟で水上を渡る時、肉體を水面に現はして居たからだと云ふ。但し僕は先刻から急劇にその冒險の必要に迫られて居る、と云ふのは昨夜暴飲の故かして急に膀胱が緊張して來た。而してこれを放出せんには必すまづ身體の下半身を舟の外部に現はさねばならぬ。舟中一同に對して其の安全策の名案を叩いたが一同これと云ふ上分別も浮ばない。結局僕の雨外套で槽を作り、

タンベが夫れを支持して居るから舟中腰を浮かせて遠慮なく放出して呉れと云ふのである。そこで案の如く悶々ながら腰を浮かせて、タンベの所謂遠慮もなく股間を開放に及びかけて居ると、他の從者がクッ〳〵と笑ひ出した。然もタンベは頗る眞面目に槽を捧げて納り返つてゐる。而して

『旦那早くなさい』

と言ふ。

『餘り好い恰好ぢやありませんな』

と徳川君が言ふ。成程自分乍ら餘り見つとも好い風態でない。

『鰐狩やよくも男に生れけり』

と徳川君が駄句る、イヤ女でなくとも男でもこれは少々困る、殊にタンベと云ふ外國人が頗る眞面目に態とらしく槽を捧持して居るので、眞個氣味が好くない。是では迚も遣り切れないので、些と早いが中食をやらうと云ふので、大に一同を說いて

一時上陸する事となつた。併しそれにしても尙二三十分遡江せねば村落が無い。そこでそれまでは大抵辛棒する事として舟を急がせた。

僕等はその部落の村長の娘で、サナヤと云ふ美人から大に歡待せられて、熾に白禍に對する有色同盟を說法せられた。

◇酋長の家◇

南國の水邊を航するものは、際しもあらぬ欝林の中に、時に矗々として林立せる椰子や檳榔の林を見るであらう。而して其椰子林の中には屹度馬來土民の茅屋がある。

椰子は土民が唯一の財產であつて夫が彼等の逸樂を恣にせしむべく、自然に與へられた天賞である。その實は食料となり、その殼は燃料となり、その葉は家具となる。無智にして蒙昧なる彼等は、彼の恐るべき猛獸と毒蛇を驅逐して無限の富を

抱擁せる千古の深林を征服する事が出來ない。爰に於てかやがて一族の繁殖につれて到底一處に定住する事が出來なくなる。そこで已むを得ず新しき子弟は更に一家を纒めて他に移轉する、斯くて一艘の獨木舟は赤裸一貫の外には何物をも所有ぬ游牧の民を乘せて、椰子の茂る水邊から水邊へと移つて行く。

天は更に彼等に幸して、到底彼等の達し能はざる深林中には椰子を生やさない椰子は鹽分を含める水邊にのみ生へる、時に水邊遠く陸上に林をなして居るものもあるが、それは文明人種が鹽を肥料として人工的に栽培してゐるものである。

新嘉坡の郊外で市街から數哩を隔つる、タンヂョンカトン邊りには、この人工椰子園が最も多い。而してその林中には點々として別莊向の洋館が建てられてゐるが驚く勿れ之等別莊の中には家主から相當の謝禮を出し、請うて借りて貰つて居るのがある。と言ふのは屋敷の周圍幾ヤードを劃して庭園となし、庭園に生へる椰子の實は家に附屬したものとして自由に借主が處分して好い事となつて居る。隨つて月

月庭園の椰子を賣拂ふと家賃を拂つて尙幾弗かの生計費が殘るのである。

如何に無慾恬淡な南洋の地主や屋主でも毎月幾弗かの謝禮を附して家を貸す筈がないが、それは他に特別の理由があるので、矢張り利害の打算から來て居る。即ち人が住まねば椰子園が荒廢するからである。

◇土民の歡迎◇

閑話休頭、僕等鰐狩の一行が今上陸せんとせる奥バンチョールの土民部落も、矢張椰子の水邊である。眞晝に近い常夏の太陽がヂリ〳〵と燬きつくやうな灼熱の光を投げて、潴水に等しきヂョホール河の支流は靜みて湯の如くに熱い。

舟が漸く其處に着くと早や林中からは裸體洗足の土民が數名駈出して、怪しげに僕等の鉢器を眺める。すると從者のタンベが一番に駈け上つて、

『これは日本のゼントルマンで、鰐狩に來たのである』

と説明する、すると漸く一同安心して、

『日那、日本々々』

と懐しげに寄り添うて來る。

彼等の痴鈍な頭の中にも、日本人は彼等と祖先が一であつて、軈て横暴なる白人の壓迫から彼等を救出してくれる救世主の如く思はれて居る。從つて白人と言ふと直ぐに生意氣と云ふ言葉は彼等の口を突いて出るが、日本人と云ふと流石に顰めた眉を解いて微笑むのである。一行はそれから此部落の酋長たるマヂッドの家に導かれて中餐の饗應を受けた。

◇毒草を嚙みて！◇

橄欖の花咲く椰子の樹蔭を傳うて、丈餘のラランが密生せる草徑を行くこと二三丁、暖風蒸々として珈琲の花の紫に薫ずるところ、一際高きドリアンの杜を背景

にして此處に土民の家屋が二三軒立並ぶ、中なるは即ち酋長マヂッドの家にして、構造は宛として日本の宮殿と異らない。用材は勿論自然のまゝの丸太であつて屋根の塀も椰子の葉や、草の束ねたものであるが、高き五六尺の四柱を立てゝ、その上に殆ど正方形の家を組む。而して家の正面から地面にかけて階段を設へ、兩横と前の三方は廻廊になつて居る。日本内地の到る處に見る鎮守の宮の本殿と馬來民族の家の構造は全く等しい。日本古代の建築が果して彼の鎮守の宮の宮殿の如きものであつたならば、亦は吾人の先祖と馬來人との間に往古何等かの交渉があつたに相違ない。人種は勿論、言語にしても同じ言葉が澤山ある。而してアクセントも似て居る。これは今更茲に言ふまでもなく、或る一部の學者によつて既に認められて居る所である。

僕と德川君はまづ此部落の珍客として酋長の家の客間に通された。客間と言つても六疊位な莫蓙敷の間で極めてお粗末なものである。爰に主客が互に名乗を上げて

握手をすると、後は莚の上に跌跪を組んで語り合ふ。握手の外は馬來も日本も大した變りはない。然しさすがは英國の統治下に育つたゞけに普通教育を受けたものは大抵英語を話す。

◇娘の哀話◇

斯くて日本紳士來の聲を聞いた家の婦女達は、忙しげに饗應の準備をする。裏手では戛々と珈琲の實を叩く音や、カレーの粉末を製する氣配がする、兎角する内一人の少年は猿の如く椰子の高樹に攀ぢてその實を落す。そして馬來刀で固き外殼に穴を穿ちて水を採る。南洋の旅客が千金にも代へ難きは渴中に得たるこの一杯の椰子の水である。

滿身汗に濡れて咽喉が砂の如く嗄いた時に、この水晶の如き透明な椰子の水を飲む。それが如何に甘味にして如何に嬉しきかは、到底餘人の想像だも及ばぬ所である。

やがて其の椰子の水はコップに移されて更に數滴のレモンを加へ、別に瓜果の水しき數片を盃に乘せて薦められる。

此時給仕に出たのがマヂツドの次女サナヤ姫であつた。年は十七八でもあらう、手製の赤き袴に同じ純白の上衣をつけて盆を目八分に擎げたるところ、楚々として且つ娉婷たる態である。訊いて見ると、去年新嘉坡のラッフルススクールの女學部を出た許りだと云ふ、成程その英語は極めて流暢である。

主人は語る。此娘の兄は目下英國に政廳に勤めて居る。そして姉は三年前同じ新嘉坡の女學校を出て、間も無く懇望せらるゝまゝに或る英國の青年醫師に嫁がせたが、

『人種の異るのは情ないものです』と嗟嘆しながら尙も言葉を續ける。

嫁入つて二年目の去年の春、その夫は故郷の倫敦へ歸省した。そして今度歸つて

來た時は其の友の妹と稱する白人の美少女を連れて來た。後はお察しの通り、娘は其の良人の虐待に堪へずして一日この山の中へ逃げて歸つた。そして一夜毒草を嚙んで果敢なくなつた。

◇馬來式の嚮應◇

馬來の酋長は暗然として涙を呑んだ。

『娘は毒草を嚙み、血を吐きつゝ、英國人を呪ひつゝ死にました』

當時酋長は新嘉坡の英國義勇兵團の一下士として勤務中、休暇を得て此の村に歸つて居たが、夫れきり病と稱して歸營せず、再び英國政府の麵麭に生きないと決心した。そして次の娘のサナヤが恰も同地の學校を卒業した時だつたので、娘も直に此の山中に呼び返した。恁くて姉娘は殘忍な英國人の犧牲となつた。然も斯の如き實例は數限りもなく行はれて居る。從來は土人の娘が白人の妻となることを幾分の

矜と考へ、娘も亦之を喜んだ傾向があつた。然しそれは臨時の彼等が獸慾の對象となつて、所謂處女の純潔を蹂躙せられた後は、忽ち弊履の如く捨てられると云ふ事が判つた。馬來民族の習慣律として、結婚後に於て夫が所有した財產の二分の一は妻に所有權があつて、離婚の際は法廷に訴へて之れを要求する事が出來る　而して英國の政廳も亦之を認めて居るが、いざ裁判となると表面妻の勝利に歸して離婚が認可されない。と言つて同棲すれば白人の婦人から壓迫されて妻は殘忍な虐遇を受ける。恁くて悲痛悶々の果ては毒草の最期を遂げるものが數限りもなくある。

『所が同樣の例はお國の日本婦人にもあります』

と酋長が言ふ。夫れは珍しい事であるが、實際日本人にもある。新嘉坡で育つて、新嘉坡で教育を受けた所謂ストレーツボーンの支那人並に日本人にも間々其の例がある。殊に日本人は數年前まで日本小學校の完全なものが無かつたので、勢ひ小學校から英米人の教育を受ける〻隨つて日本語よりも英語や馬來語の方が話し易く、

日本字の新聞さへも讀めなくなる。そこで已むなく結婚の對象を英語國民に求める而してその結果はよし毒草の最後とならぬ迄も自暴自棄となつて浮ぶ瀬もなき墮落の淵に投じて、終世を奈落の暗黑面に送るムスメとなる。南洋名物なる日本ムスメの智識階級に屬する者の中には恁る種類の女が稀にある。

談いよ〳〵進んで排英の氣將に頂點に達せんとするの時、先づ珈琲を先として其處に馬來式山海の珍味が並べられた。

◇我が劒を受くべし◇

『我が訓を信ぜざるものは我が劒を受くべし』

てふ鋭きマホメットの訓を奉ぜる馬來人は、絶對に豚肉を口にせぬが、鷄肉や魚肉は構はない。而して酒は勿論一滴も許されぬ。殊に今日は純馬來式と云ふ僕等の註文なので一層その特色を發揮して居る。山羊の乳菓や、椰子や、落花生の料理、そ

れから名物のカレーライス、これは吾人の最も珍重するものであつた。先刻絞めに鷄肉に、捕りたての川蝦や、茄子を加へ、カレーは今粉にしたばかりの、頗る香氣の好い辛いところ、それにバナ、のフライも出た。而して食事は一一右の手に掴み喰ひである。右の片膝を立てゝ、右の二の腕を膝の上に乘せる、そして左の手は不淨とせられて一切食物に觸るべからず、常にその手は座敷へ突いて上半身を支へるのである。

恁くて食事が濟むと大型の茶碗に清水が汲まれて各自へ配られる。それで手と口を洗ふ。それから最後にシレーと云ふ青い樹の葉を出す、これに檳榔の實を交せて嚙むと口中眞紅の液體に依つて染められるが、これを吐くと後は清爽として氣持が好い。

◇有色同盟◇

時はもう眞晝頃でもあらう、層々たる積雲が遙かなる天際に簇つて、一朶雪白の千斷れ雲が遠く赤陽を掠めて碧落に飛ぶ。そして裏手の深林では樹間嗤々として所在に山鷄の鳴く音が聞える。サナヤ孃は乃ち喟然として語る。

『妾達南國の民はあの山鷄のやうに自由に開放せられて自然のまゝに哺れたのです自然に生れて自然に生きてそして自然に死んで、謔もなく、僞善もなく、虚榮もなく、而して生存の競爭がないから方便もない。文明國人の稱して所謂太古の民でありました。幾千年の昔から嫉妬と云ふものを知らぬ平和の民でした』

それが轉て文明と云ふ美しい抽象名詞に化けてゐる所の、僞善と嫉妬の結塊によつて名殘なく彼等の平和を攪破せられた。彼等は生きて行くに働かねばならなくなつた。これは彼等が最も驚異に感じ壓迫を感じ、不安を感じ、一方ならず心の平和を亂された一つである。次で貯蓄、競爭、擠排と云ふやうな忌はしい言葉を覺えた彼等は安心して遊牧的樂天の生を樂しむ事が出來なくなつた。年々巨萬の富源は英

國の倉に向つて送り去られる。そして何事も易々として彼等の命に從はねばならぬ而して萬一之に反すれば法律と云ふ人間の作つた不自然極まる束縛に觸れねばならぬ。

『生きよと神に與へられた父母の地は、殆ど其全部を異人種に沒收せられました。世界中日本を除いて他の有色人種は皆さうです。十餘億の世界有色人種は茲に日本を盟主として全世界の平和の爲め有色同盟を作らねばならぬ』

◇日本は英國飛一番犬◇

火の如く熱したサナヤの顏には忽ち迸るやうな憤怒の色と反激の氣分が漲つた先刻から氣持好さゝうに娘の氣焰に耳を傾けて居た老爺のマヂッドは又言ふ。

『何故日本は此の戰爭の最初獨逸と聯合して、香港、新嘉坡から濠洲その他南洋島嶼一帶にかけて一擊の下に取らなかつたのでせう。英國の港々に日本の軍艦が大

の如く番をして居るのを見ると、印度人も支那人も皆嗤つてゐます』

議論の是非は兎も角も、恁る南蠻の山中に於て、然も無痴蒙昧の代名詞の如く云はれて居る馬來土民の小娘や、酋長の老爺から有色同盟の説法を聞かうとは僕も德川の若殿も一向に期して居なかつた。然し遺憾ながら此處ではイエスと答へられぬこれが危く英國人の耳に入ると事が面倒になる。そこで好い頃にお座を濁し、後は德川君のレンズで一同紀念の撮影をなして引き上げた。

酋長父子や以下の眷族は何れも僕等を舟まで見送つた。そして是から上流は殆ど鰐の巣窟と云はれる位で然も兇猛な奴が多い。日中は大抵陸に上つて樹蔭で晝寢をするが、朝と晩とは屹度群をなして波に浮く、水に泳いで居る時は決して鰐の後半身に舟を寄せるな、恐しい其の尻尾で打碎かれるなどゝ種々親切に注意をして呉れた。斯くて一行は長堰野水を渡り、鰐と虎と象と犀と大蛇と豹の棲む深山の水邊に蔭みて決死の夜營を張る事となつた。

◇鰐の棲む碧潭へ！◇

幾十數丈の巨木大樹が森々として天を掩ひ、丈餘の草萊が蔚然として地を覆す中に、ヂョホール河の支流は蜿蜒蛇の如く紆盤繰り横たはる、土人は稱して『森の塹壕』と言ふ、成程塹壕である、十幾丈の深き森の塹壕である。世にも恐しき塹壕である虎も豹も犀も毒蛇も、さては兇猛類なき各種の鰐も、皆此の流れに依つて生きつゝある。而して太古以來是等の猛獸と毒蛇と、蠻霧瘴煙に依つて守られ來りたる神秘の森は、今吾等の目前に歷々として現實を曝露しつゝある。

『冒險も此處まで突込んで見ると愉快ですな』

と德川さんが言ふ。

『眞個です。どうせ命の惜しくないお互同志だから是が出來る。愉快と云ふよりも痛快です』

と僕が答へる。

時はまだ亭午過ぎて間も無いに。もう森の底を行く吾々の四邊は暗かつた。直徑丈餘に達する大木が果てしもなく立ち駢ぶ、由來あつかましく仰山に、思ひ切つて誇張した形容詞を用ゐる支那人も、遂に南國の森は知らなかつたか、不幸にして僕は此光景を如實に現すべき支那の形容詞を知らなかつた。

兎角する内一天卒かに搔き曇つて森に谺して走り行く時雨の音が物凄く聞ゆる。

オーズオースが言つた。

『世に何が寂しいと言つて、人なき太古の森林に注ぐ時雨の音ほど寂しいものはない』

と成程さうである。然も今の僕等には命懸けの危險が伴つてゐる。

四方はいよ〳〵暗く雨は目近に迫つた。

『旦那暫く待ちませう、恁う暗くちや鰐と獨木舟が打つ衝るかも知れない。』

と從者が言ふ、軈て舟はピッタリと、只ある大樹の下に着けられた。

◇群猿啾〳〵◇

そして從者は一同でカンバスを張つて雨の用意をした。

熱帶の雨は極めて劇しい。宛ら鎗を束ねて灌に投ずるが如く劇しい。暫くする内其も忘れたやうに霽つた。そして太陽は一際鋭き熱光を射出した。それから舟は又遲々として大樹の下を行く。呦々たる鹿の鳴く音と、猿の叫びが啾々として聞えるやがて行く手に方つて一頭の大猿が水邊に蹲踞り乍ら手を洗つてゐる所を見た。

『あれなら僕でも擊てる』と僕が言ふ。『ぢや練習にやつて見なさい』と德川さんが言ふ。タンペは命ずるまゝに舟を寄せて行く、然し猿は舟の吾々を見ながら一向逃げようともしない。極めて平氣である。そして蹲つたまゝ凝乎と舟の近寄るのを見てゐる。僕は銃の照星をまづ彼の胸に向けた。舟は約三間の距離に近づいた。然も

尙猿は動かない。不思議さうに一方を眺めてゐる。可愛い者である。

『迚もこれぢや撃てない』と銃を立てた、途端件の猿は宛ら電氣にでも打たれた如く、一間ばかり跳び上つた。そして大樹の枝を抱へ乍ら聲も得立ず縮つてゐる。ハテナと思つて凝乎と其邊りを物色すると、不思議、今迄喧ましく啼いてゐた群猿が一度に聲を密めた。そして件の大猿を隔てたる三間ばかりの彼方に、ヌッと斜に横たへた大樹の枝が風なきに辷るが如く搖いでゐる。

『呀ッ』とタンベが叫んだ。續いて『大蛇だッ』と從者の一人が叫んだ。

◇怖ろしい黒蟒◇

鬱々萬朶の樹葉は層々打ち重なつて天日を掩ひ、晝尙暗き幽暗の樹下闇、壁立萬仞とも言はうか、右も左も摩天の巨木が屏風の如く立て廻す。而してその底に瀞みたるヂョホール支流の水は、恰も碧潭の姿をなして底ひも知れぬ千古の沈默を守つ

てゐる。

斯かる中に我等を乘せた一艘の獨木舟は爰に五人の生命を託されて心もとなく浮きつゝある。然も其の目前十數ヤードの彼方に方つて怖るべき殘忍なる活修羅場が開されてゐる。

巨木の枝の搖ぐと見たは大蛇であつた。猿の逃げもやらずして萎縮してゐるのはそれに狙はれてゐるからであつた。

夫と見ると土人の從者は雙腕に渾身の力を込めて、颯つとばかり數間の後方に船を漕ぎ戻した。そして三人等しく立上つて雄々しくも馬來刀を眞額に振り冠つた。

『旦那鐵砲は急焦ちやいけない。凝乎と狙つて、凝乎と狙つて首から上に！』と息急きながら號令する。咄嗟德川少尉と僕は急ぎモーゼルを構へて發射の意をする成程これは危險であつた。先刻この獨木舟の位置は慥に大蛇の襲擊距離なる、彼が身長の圏内に居た。

銃を構へながら凝乎と恁う見澄ますと、大蛇はその前半身を更に他の枝の支點に横へてゐる。

而して首から上は斜に件の猿に向けられ、然もその口は割くるばかりに開かれてゐる。但し側面から見た僕等には、所謂火焔の如きその口中は見られなかつた。

◇森の惡魔の殘虐◇

さて此方の猿はと見てあれば、憐れ刻々に迫る死の運命を豫期しつゝ、尙生きたさの執着に引かされて、怨めし氣に白き齒を剝き乍ら、聲さへ得立てずビッタリと大樹の幹に抱きついた。Greet Fuffader（グレートバッファダー）とタンベが叫んだ。グレートバッファダーは一名黑蟒と言つて森の惡魔と綽名さるゝ、兇猛類なき大毒蛇である。續いてタンベが氣魂しく號んだ。

『オイ皆の者コリヤ迂濶に手を出しちや危險い。誰か早く火を焚くんだ。そして成

るべく煙を多くして燻べろ、夫から鐵砲の旦那油斷しておくんなさんな、大事だから』

日頃無鐵砲な、命構はずと言はれたタンベ、そして從來幾度か各國人の猛獸狩に隨行して、白人間にも其名を喧傳されたタンベ、それが大事だと叫ぶ限りは餘程の大事に相違ない。且つその大事を聞かぬまでも既に其兇猛を聞き知つてゐる黑蟒と知つた時、僕の神經は言ふべからざる恐怖に戰いた。黑牛の皮を鎧うた如き黝黑の胴體が執念くも大樹に絡まつて鉛の如く重々しく枝に懸る。そしてそれが秒一秒獲物に對する殘忍なる攻擊の姿勢に轉じつゝある。

兎角するうち從者の一人は筈に敷いた椰子の枯葉に火を點じた。

天地閒寂として聲を呑む中に、紫紺の煙は靉々として森の下枝に搖曳いた。

◇日本男兒也◇

千古萬古未だ曾て人間の足跡を印せざる太古の深林に分け入つて、僕等は今兒猛類なき黒蟒に會してゐる。而して生命と恃む獨木舟は行くに行かれず、歸るに歸れぬ五名の生命を乘せた儘、鰐の棲む千仞の碧潭に浮いてゐる。今數秒の後には屹度彼の孤猿は黒蟒の腹中に葬られるであらう。次いで危險は僕等の身に及ぼして來るは必定、これを防ぐべき唯一の武器としては縷々たる一穂の煙煙であるが、苦の枯椰子も最う大分焚き盡してゐる。後はモーゼルの彈の續く限り、馬來刀の刄の碎けるまで五人が必死に防ぐより他はない。『萬事休矣』と從者の一人が言ふ。『畜生ッ、來ば來い』とタンベが敦圉く。

『ネヴアーマインド』と僕が言ふ。『余は日本男兒なり』と德川少尉が言ふ。蓋し誰の顏にも隱し切れない恐怖の色、困惑の氣は漲つてゐる。

恁くて刻々危險に頻しつゝある一艘の獨木舟と、猛惡なる黒蟒と、而して其黒蟒に狙はれたる一頭の孤猿との結局が、如何にして奈何なる大尾を遂げるか、暫

くこれを讀者の推測に預けて、僕は爰に熱帶の大蛇に就いて少しく研究し得たる所を記したいと思ふ。

◇大蛇と毒蛇◇

等しく熱帶地に棲息せる大蛇と言つてもその種類は極めて多く、彼の印度洋に於ける海蛇Seaserpent は別として毒蛇のCobra及び前記Puffader と稱せらるゝ者にもその種類は多種多樣である。概して毒蛇は形體の小なるものに多いが、中には稀に大きなものもある。殊に黒蟒の如きは長じて人を呑み、饑るた時には豹にでも虎にでもかゝる。是等多數の大蛇は何れも學理的には色々に命名され、種々と分類されゐるが、素人向にはその攻擊の方法と形式によつて大要三種に分ける事が出來る彼等の或者は其胴體を柱の如く眞直にして、體の後半身を以つて鋭く地面を打つ、而して其打力によつて蛇身は棒倒しに廻轉して獲物を追ふ、然も此廻轉は極めて迅

速である。幾何學は直線が二點間の最短距離であると說く、然るに此大蛇は己が身長たる幾丈の直線を折り返し折り返し、獲物に向つて投げ懸くる。隨つてその迅い事は申すまでもない。恁くて彼は其身が漸く獲物に近づくと一際鋭く尻尾を以て敵を打つ、打つと同時にクルクルと其胴を卷付けて締め殺す。而して此種類は多く大平野の水邊又は叢間に棲むものである。

次は即ち吾々一行が今目前に、苦められつゝある所の黑蟒であつて、その行動は前記の如く迅速ではないが、牙の後方に恐るべき毒瓦斯を塡充せる毒囊を有つ。而して徐々として一定の距離に達すると猛烈に右の毒瓦斯を放射して即座に敵を瞑眩せしむる、更に怖るべきは一種の催眠的魔力を有する彼の眼光であつて猿とか栗鼠の如き小膽なる動物に對しては最もよく之を使用する。而してその催眠的眼光の魔力とは何ぞ？

◇大蛇の襲擊法◇

黑蟒が有する催眠的魔力、それは前にも言つた如く、彼の毒囊のやうに、敵のすべてに用ゐるのではなく、概して小膽なる動物にのみ用ゐる。譬へば數十丈の高樹に走る栗鼠を得んと欲せむか、まづその巨體を動かして己が存在を相手に知らしめる。而して燈の如き彼が巨口を豁と開いて劈頭對手の心膽を奪ふ。と共に爛々として燃ゆるが如き眼光は、逆るが如く對手の眼に集中せられる。この時既に樹上の動物は彼が恐るべき兇猛の術中に陷つてゐる。突然の驚愕によつて名殘なく威嚇せられた彼は、心身頓に萎縮して四肢は宛ら感電したもの丶如く痲痺するのである。而して轉ぶが如く枝から枝へ跳んで、最後は死を待つ黑蟒の巨口に自ら投ずるのである。

而して他の一種は南洋に於て最も多く見る所のカヴールである。彼は前者の如く

猛惡なる毒囊を持たぬのみならず、催眠的魅力もない、たゞ體の偉大なると行動の極めて敏捷なるとの特長を利用して思ひ切つて大なる動物をも攻擊する、夜間豚小屋に襲來して幾十貫の大豚を呑み去るのは大抵彼れである。但し滿腹の時は極めて温順しく、空腹を感ずるまでは悠々として、林中深く惰眠を貪る。新嘉坡の市中時に支那の海南人が、大牛の股の如き胴切りの肉を賣り歩いてゐるのを見る。これは彼が土人に捕はれて皮を剝がれ、その肉は食用として鬻がれてゐるのである。

◇蠻勇ローマンス◇

日本人には蛇の肉と聞くさへ嘔吐を催す次第であるが、その肉は甚だ美味であつて海南人は好んで是れを食ふ。而してその皮は美事なる大鱗によつて覆はれてゐる新嘉坡の各ホテルには時々土人がその皮を乾燥して賣りに來るが、疊大の廣さで、長さ三四間のものは一枚十八弗位に吹きかけるが上手に買へば七八弗で得られる。

是に就て面白い挿話がある。名前は特に預つて置くが東京に住むさる政界の名士の家で、此カヴールの皮を廊下の敷物としてゐるものがある。時々訪客がその由來に就て聞くと先生得々として語つて曰く、

我家に多年養はれたる一書生あり、去歳圖南の大志を抱いてボルネオに渡航しけるが測らずも一夜散策の途上大蛇の豚を呑めるを認め、乃ち同人が携へたる日本刀を拔き放ちて一刀に斬り得たり、爲めに土人の一酋長大に彼が勇を稱し、即ち其愛孃を彼れに與へてその後嗣となす。彼既に南蠻の一酋長となる、然も主恩忘じ難く一歳歸り來つて件の蛇皮を余に贈れりと。

當時僕はそのローマンチツクなる談話を聞いて大に其青年の勇氣を嘆賞した一人であるが、今回南洋各地巡遊に際して到る處、日本人の酋長はないかと訊ねたが、遂に其人に會はず、且つそんな事實は話にも聞なかつた。而して新嘉坡海岸の一ホテルで土人が鬻ぐ大蛇の皮の數々を眺めた時に成程と合點した。

そして其話は或はウソ蛇なかつたかと思つた。

◇孤猿と黒蟒◇

滿山風死して一鳥の啼く音も聞えず、果しもあらぬ太古の森林は蔚々として、千里盡きせぬ幽暗の樹下闇に韞まれた。而して今し彼方の樹間に於ては、怖るべき黒蟒が破戒無殘の巨口を開いて寄るべなき一頭の山猿に呑噬の殘虐を敢てせんとする。

慘たるこの活修羅場を遶りてヂョホールの支流は藍碧の水深く靜み、萬籟聲を呑みて天地深沈たる光景を呈してゐる。而して我等の獨木舟は件の現場を隔る僅々數ヤードの此方に於て、覺束なくも一縷の燻煙を擧げつゝ大蛇の危難を脱せんと謀りつゝある。然も燻煙の料は漸く盡きたり、而して赤道近き熱帶地の眞晝は、殆んど無風に等しく、煙は縷々として垂直に天に騰る。

『寧そ全速力をかけて漕ぎ拔けて見やうぢやないか』と德川さんが言ふ。

『そんな無鐵砲な事が出來るもんですか开麼位なら旦那自分で跳び込んで行つて喫はれて來なせえ』とタンペが言ふ。

『ちや一旦引き返して再擧を計るか』と僕聊か軟論を吐く、但し德川將軍が言下に退けて仕舞つたのでこれも否決。

『何れにしても煙を黑蟒の方に送らなきや駄目だ。皆煽げ〳〵』と將軍威猛高に勵聲叱咤するので、各自が帽子を脱いで懸命に煽り立てる。然も煙は僕に一間ばかり水面を這うて聊か低迷の氣色を示すが、後は以前の如く垂直に天を指す。兎角するうち、

『呀、遣られた〳〵』と從者の一人が叫んだ。僕と德川君は卒然雙眼鏡を向けて彼方を眺めた。

◇巨口の犧牲◇

成程遣られてゐる、黝黑い鉛色の胴體が大樹の搖ぐが如く、且つ大濤の盤迂るが如く徐々として動きつゝある。而して犢の頭の如き彼の黑蟒の首は今や如龜とばかり擡げられて、咬へた猿の後半身は猶彼が巨口の外部に露れてゐる。そして雙の後足は棒の如く黑蟒の口から兩方に突出し、赤き臀部は血の如くにして、恰も一團の火を吹くが如くに、黑蟒の形相は愈々物凄い。

『とう／＼呑られた。もう大丈夫だ』とタンベが漸と笑顏を見せる。とう／＼呑られて大丈夫もないもんだ。

『何が大丈夫なものか、猿の後はお互にこちらの番だ』とたしなめる。

『イヤ大丈夫です。黑蟒は旦那方ほど慾がないから、腹さへ膨れたらもう此方へは懸りつこなし。御覽なさい今にボッ／＼退きあげるから！』

とタンベ大に通振つて景氣づく。然し黑蟒はなか／＼退きそうもない。獲物を咬へたまゝ時に首を振動するが、夫さへも容易に呑み込む風もない『どう爲たんだらう』とタンベに訊くと、

『矢張り呑んでゐるんです』

蛇が物を呑むには人間が團子を呑むやうには行かない。まづ咽喉部を眞空にするそして自然に嚥下するのであつて却々手數が懸ると說明した。

◇大雷雨◇

風一陣轟とばかり森から森へ衝して吹き渡ると、雲は倉皇しく空に迷うて、波は紺碧の底に一抹のセピヤを含んだ。

『降りかな』と一同不安の眼と眼を見交したが、軈て鉛色の雲が森から海へと沙垂れかゝる。

兎角するうち空は無遠慮に雨の準備を整へた。遙に見遣る土民部落の椰子林は早くも銀線の珠簾を懸けて、近き此方の蔚林は嘈々として雨を呼ぶ。

サテ、例の黒蟒はと見てあれば嚥みもやらず吐きもやらず、口には今尚件の大猿を咥へて居る。而して彼方に雨の音を聞くと等しく徐ら巨頭を擡げたが、やがて悠々として宛ら無人の境を行くが如く、大樹の根方から搖ぎ出した。そして森の奥へ〳〵と爬うて行く。斯くて漸く彼の姿が杜蔭に消えて行くと、此方對岸の森の巨木に集つた猿の大群が、一度に揑と雪崩落ちる。そして枝から枝を傳うて、氣魂しく啼き乍ら騷ぎ出した。而して啾々たる其の聲はやがて一團となつて、同じく森の奥へと遠ざかる。いづれは大蛇の口に咥へられた友の最後を見屆けるのであらう。大蛇の慘虐は恁くて終つた。而して雨は槍の如く鋭く瀧の如く劇しく降り出した。天地渾然として晦瞑の暗に包まれたるが、閃電時に闇を縫うて霹靂物凄く天地を震撼した。而して深林遠く呦々として啼く鹿の聲が斷續して聞ゆる。

◇難破の準備◇

一枚の帆巾を屋根として、吾等の獨木舟は暫く此豪雨の中に天運を待つた。行くも止るも只管天運に任せる他はない。人類の生棲を許さぬ此神秘的太古の深林を冒せる勇者も、大自然の偉力に對しては、何等抗爭の力を持たなかつた。而して鰐の潜む千仞の淵に浮び、目前大蛇の猿に對する殺伐なる活劇を眺めては、さすが南征の豪放兒も人知れず己が心の一念に脈々たる恐怖の襲ひ來るを拒み得なかつた。然もその上に此大雷雨である。呼べばとて叫べばとて血に饑えたる猛獸の外には何一つ應える者はないのである。而して瀧の如き雨は時に掩布を排して芝の如き獨木舟に横流する。

假令半開の民が石斧を以て穿ちたる不便極る獨木舟とは言へ、吾等五名の生命を乘せて無人の蠻界に託生の義務を果さんとする勇者である。これを此深山の奥の水

底に沈められては一大事。

『皆の衆靴を脱げ〳〵』とタンベが叫んだ。叫ぶものは既に自ら範を示して舟中の水を汲み出しつゝある。

葵御紋の鞍置かせ
鞭は珊瑚よ紫手綱』

世にしあらばその昔、徳川の御若殿、威風邊を拂うて陣頭に立つべき人も、今日は三千哩外の蠻界に來つて名もなき眇たる蠻人の命に從はねばならなかつた。

諸爽矣とばかり各自が靴を脱いで、懸命に水を汲み出す。汲めども汲めども雨水は間斷なく流れ込む。腕は絢え、氣は疲れて茫然立ち盡す事幾多度……恁の如くして苦闘する事數刻にして雨は漸く霽れた。熱帶の雨は發作狂の如きものである。雨がやむと空は轄然として忘れたやうに晴れる。

空は晴れたが雨と大蛇に時を過して、陽は早や彼方の水平線上に春き、斜に眞紅

の夕陽を森に懸けた。もうボツ〳〵鰐が浮ふ頃であるとタンベが言つた。

◇鰐が浮いた！◇

蒼然として日は暮れたり。

暮靄は遠く海面を罩めて、次第々〳〵に森の樹蔭に迫り來る。轄然と晴れた蒼穹には夜鷹の群が咫々として啼き渡り、更に天魔の如き怪物の黒影が時々我等の頭上を掠めて翔り去る。翔り去つては遠く暮天の暗に消え、消えては又來つて深林の暗に入る。然もそれがソヨとの羽音も立てず、スイ〳〵と宛ら幽魂の冥途を行くが如く靜かである。天地悽然として萬象は深き寂默の氛圍氣に掩はれたる蠻界の山中に於て、この奇なる怪物の頭上を翔る姿を認めては、如何に度胸を極めて居ても堪らない。

『薄氣味の惡いものが居るが、アレは何？』とタンベに訊くと、『クルワン』と一種

極めて單調にして平然たる答をする。馬來語の極めて貧弱な僕は此クルワンと云ふ言葉を覺えてゐなかつた。クルワンクルワンと頻りに頭を振つて考へて居ると側から徳川君が『大蝙蝠』だと註釋した。蝙蝠と聞いて聊か胸は安んじたものゝ然もその蝙蝠たるや、日本の夫の如き小さく可愛らしいものではない。一言にして盡せば。大猫に翼の生へた如き者であつて、氣味の惡い事一通りでない。此奴が又大の殘忍性を帶びて居て、時に五六尺もある。青大將の血腥い奴を咥へて飛ぶ。

恁の如くにして四邊は全く夜魔の領土となつた。而してヂョホール支流の水は鏡の如く冴え渡り、天象は如如として水底に映じ來る。かるが中に我等の獨木舟は、鰐の襲擊に備へつゝ徐々として漕ぎ上るのである。

大蝦蟇が鳴く！。

嗤々として所在の樹蔭に、醜怪極まる號びを擧げつゝある。而して其聲たるや、恰も鍼力鑵を叩くが如きものである。タンベの說明する所に由るとそれがベラボー

に大いものださうな。

◇戀の病療養所◇

『嫌だ〳〵飛んでもない所へ連れて來られたもんだ、是ぢや今宵の命さへ險呑だ』死ぬのは一向構はないが、死ぬにしたつて、何もこんな物騷千萬な場所を撰りに撰つて死なくも可い。是ぢや迚も浮ばれさうもない。贅澤ぢやないが。

『切めて日本の四疊半で、油の如な日本酒を一杯飲んで死にたい』

『景氣の惡い事言ひこなし、お互に日本男兒の意氣を見せやうてんで、合意の上で決行したんだから、罪は君にもある。假令死んでも僕を怨んで化けて出ちや困る。迷ふ可らず迷ふ可からず』

と徳川將軍大に沈着の態度を見せる。但し將軍と雖も內心餘り好い氣味ではなささうである。證據には先刻からモーゼル銃の安全機を脫したまゝで、身動きもせ

す確乎と握り締めて御座る。そして時に溜息をつく、而して曰く、

『尾崎(紅葉)さんは問貫一を高利貸の手代にせずと一日でも可いからこの南蠻山中に連れて來て寢かせれば好かつた。さうすれば道が貫一さんも戀を蟬脱して改心する事疑ひなし』

成程妙案である。イクラ貫一でも此奇怪にして危險なる、凄寂にして驚異に富みたる熱帶の山中に來つて、猶宮さん〳〵と黄色い聲を出す譯には行くまい。夫ぢや大正の貫一をドッサリ祖國から輸入して、戀の病療養所を此處に開設しては甚麽もんだらうと僕が言ふ。

二人は恁くして互に怯ぢた心を見せまじと、強ひて冗談を言ひ合つた。すると『旦那鰐が浮きました』とタンペが報告した。然も彼は悠々として葉卷の煙を吹いてゐる。

◇月下の鰐群◇

一碧に冴えた蒼穹は、透徹微塵も霞まぬ大氣を罩めて海から森へと懸つてゐる。而して森の幽暗と、暮天の晴光が相交つて暈化さるゝ南の方の空際に方つて、恰も十字架の形したる南極星が微茫として輝いてゐる。タンペは遙かに彼の星座を指示しつゝ語る。

『あの十字架の主星から直に視線を此の流れの水面に轉じて御覽なさい。暮靄で瞭然とは解らぬが黑き材木の如き影が動いて居ます、あれが鰐です。』

言はるゝまゝに德川君と僕はレンズを向けて舟の行く手を眺め入つた。

成程タンペが言ふ如く彼方の上流に當つて奇怪なる黑影が動いてゐる。一際茂るマングローブの杜を遶り、川は一彎して曲水の流れをなせる處、三々伍々群をなして浮遊せるものは疑ひもなく鰐である。

『百七十米突』と徳川氏は直に距離を測定した。舟はピッタリと停められた。一行の豫定は、彼の鰐の浮ぶ曲水の地點から、向ふ二浬を遡江して其處に舟を泊し、更に深林を分けて二哩ばかり山奥に這入ると、此處には昔人肉を啖つたサカイ民族の一部落がある。此部落を視察、旁其處の酋長に談じて、一夜の雨露を凌ぐ積りであつたが、今目前その關門を鰐の群に阻まれては迚も通過し得らるべきでないと言つて日は早暮れてゐるので此一群を退治して前進する事は更に困難である。よし是能ふべしとするも是からサカイ部落までの陸行が危險である。犀も居れば虎も居る。豹も居れば象も居る。夜間是等の猛獸を擊退するに僅々五名の人間では些と心細い心細いと言ふよりは絶對に不可能である。

◇進退谷まる◇

爰に於てかタンペの説を入れて。一同は此處に假泊する事となつたのである。而

して爰に又一つの大問題が起つた。食糧も彈藥も充分用意はしてあるが、纔に五人を乘せ得たる此芝の如き獨木舟に、一同が皆で寢る事は愚か、碌々足を延べる事も出來ない。よし五人が跼坐つた儘舟中に曉を待つとするも、近々一町餘の彼方には、獰猛な巨鰐の一團が、夕の飼食を褒つてゐるではないか、萬一夜中に於て彼等の一群から、襲來されては大變である。一群に非ずして僅か一頭でさへも危險である。强烈な彼の尾が一振すれば舟は木端の如く碎かれて五人の者は骨まで舐啖られるに極つてゐる。さりとて陸上に眠る事は更に危險である。天幕を張るには森の巨木を伐り開かねばならぬ。猛獸除の點火裝置もせねばならぬ。暫し評議に時を移したが、誰として此際妙案も浮ばない。全身恐怖に襲はれた一同は、徒らに戰き徒らに困惑するばかりであつた。從來は苟且に使用し來りし進退谷まるの言葉が今は切實に吾人の身邊に迫つてゐる。

『困つたな』とさすが蠻猛のタンペも首を振る。

『タンべどう仕よう』と徳川將軍さへも青くなつた。兎角するうち、日はトップリと暮れて月は樹の間から一團の清光を斜に投げた。水も空も一色に打ち煙つて、川上遠く銀色の夜霧が水面に這ひ擴がり、漣然たる波の間に〳〵彼の鰐の影のみが黑く動いてゐる。

◇決死の蠻行◇

月は漸く地平線上に昇つたらしく、混漾として海の如きヂョホール河の水は、斜に月を浴びて銀河の如く耀いてゐる。而して霧は深く水面を掩うて次第に四邊に擴がり、軈ては森も林も茫乎として夢の如き蔭影を浮べた。森の奥では名も知らぬ野獸の物凄き咆哮が斷續して起り、頭上には朦朧たる霧の中に奇怪なる夜鳥の群が天翔る　兎角する中夜霧は纔に薄れて、天地一抹乳白の羅に包まれた。而して遠く打ち霞みたる月光を透して、浮きつ沈みつせる鰐の姿が分明に認めらるゝ、然も彼

等の一群は行く〳〵獲物を追うて徐々に此方へ近寄りつゝある。恁くては此後數刻を待たずして彼等と吾等の獨木舟は水上に衝突せねばならぬ。行くも返へるも危險であるが。坐して彼等の來るを待つは更に危險である。さりとて舟を捨てゝ上陸すれば、其處にも血に餓えたる猛獸がある、やがてタンべは決然として立ち上つた。而して莞然と頬笑んだ。此頬笑は彼が内心何事かを一決し斷乎たる處置をとる時の前提である。

『旦那心配ネー、大丈夫だ』と言ふ。

而して彼が十八歳の時に彼の有名なルーズヴェルトの獅子狩に隨行し、亞弗利加の山中で一度這麽目に遭つた。其の時彼が引率せし十餘名の勢子は地中に穴を穿ちて一夜を曉し、漸く生を全うした事に想到したと語つた。果して彼は其穴居の猛獸除を行ふべく決したのであつた。

◇爆破作業◇

恁くて舟は直ちにマングローブの根方に繋がれ、五人は各自武裝して陸岸に飛び上つたが、僕と德川君はタンベの命ずる儘に水邊近き巨木に攀ぢ上つた。攀ると言つても幾抱もある大なので三名の土人を人梯子として漸く三間ばかり上方の枝に達した。而して吾々兩名は樹上から發銃の用意をして下なる二人の穴窄作業を護衛するのである。タンベはまづ馬來刀を持つて十數碼彼方の雜木を斬拂ひ、更に一本高きドリアンの大木の根方を掘り始めた。勿論シャベルや、鋸なんどは豫て用意してあつたので、作業は左程に困體ではなかつた。唯困るのは作業中猛獸の襲撃を恐るゝ事である。爲めに樹下では三人が交互に立ち上つては、

『旦那見張は大丈夫か、油斷しちや困りやす』と言ふ。そこで樹上の二人は八方に眼を配つて見張りをやる。而して二つの銃口は斷えず、彼等の周圍に向けられた。

やがてタンベは彼の大木の根方にダイナマイトを裝置し終つて、愈々點火する運びとなつたが、千慮の一失か將又必要を認めなかつたのか、出發準備の中に導火線の用意を忘れて居た。其處で三人が又復一緒に集つて評議する。而して樹上と樹下とでタンベと僕との會話が始まる。

『惜しい事だが折角のダイナマイトも導火線がないので駄目だ』

『それぢやお前方の中で決死的に飛び込んで點火しろ』

『冗談言つこ無しだよ旦那、何が決死的なものか、全然必死的でさあ、イクラ足が疾くてもダイナマイトの爆破るにや叶はネー』

『叶はねーたつて何とか仕なくちや此儘でゐたら五人共殺されなきやならん。何とか仕ろ』

德川將軍と僕は樹上である。殊に兩人共銃を持つてゐるので氣が強い。然し二人の土人とても誰一人犧牲となつて點火仕ようと言ふ者がない。

◇從者の脱走◇

月は皎々として大江に浮び、白露は團々として滿樹の葉末に珠を置く、而して所在の樹蔭には的礫として萬點の螢火が點じられた、千古萬古人の住はぬ深林の奥のその寂默の世界に彼等は無言のまゝに生れる。そして無言の儘に死んで行く。如何に其光が深沈として靜かなるかよ、樹上に脱れて纔に生と死の接觸を保ちつゝある絶東の二遊子は、この崇嚴にして幽婉なる南國の自然美に打たれ、覺えず

『絶景ッ』

と叫ばざるを得なかつた。兎角する中森の奥では物凄い虎の吼びが震ひ起つた。と樹下の三人は矢の如く駈けて河中の獨木舟に飛び込んだ。そして物をも云はず纜を解いて逃げ去らんとする。舟を持つて逃げられては一大事。

『コラッ逃げると撃つぞッ』と僕が咄嗟の氣轉を利かせて脅しつける。絶對絶命の

土人三人は愕然として其場に立ち盡した。そして雙の手を擧げて『お救け』と叫び

『神よ　と號く。

『タンベ貴樣は却々勇俠な奴だと思つたが案外度胸のない奴だ。ルーズヴエルト隨從以來の勇名に泥を塗るかッ』と徳川將軍威丈高に叱りつける。

『ダッテ俺ア虎に喫はれちや詰らネー、同じ死ぬなら神樣の使の鰐に……』

と皆まで言はせず、一發の銃聲が天に轟いた。

『逃るなら逃げて見ろ』と徳川君が鋭く叫んだ。

『逃げるんぢやネー』とタンベは顫ひ聲。

『逃るんぢやネーなら何とか仕ろ』と僕が怒鳴る。そこで三人は戰き乍らそろ〳〵と這ひ上る。

『諾し好い事がある』

と徳川君が言つた。言ひ乍らポケットから懐中電燈を取り出して狐鼠〳〵遣つて居

たが卒然樹下に投げ下した。何か特殊な裝置をしたものか、光は煌々として草萊の底に輝いた。

◇千番に一番◇

『タンペその電燈をダイナマイトの爆發點へ裝置しろ。俺が此處から擊て見よう』

と徳川君

『巧いッ名案々々』

とタンペが勇み立つた。斯くて彼は二人の友に馬來刀を持つて護衛されつゝ怖々ながら忍び行く。この間に徳川君は靴下を脱いで銃を負ひながら、大木を攀ぢ始めたそして十幾丈の殆ど大木の絶頂まで登つて行つた。

『徳川さん蛇を用慎しなくちやいけない』と僕が下から注意をする。

『大丈夫、咬まれたらそれ切りだ』

毒蛇に咬まれてそれ切り大丈夫はちと心細いが、此際これを懸念するの餘裕もない。

『斷乎として行へば鬼神も是れを避く』と樹上の勇者は叫んだ。

軈てタンペは電球の裝置を了つて歸つて來た。掘り下げられた大木の根方が茫乎として明るく暗を壓して見ゆる。

『電球の上方三吋の處を擊つて下さい』

とタンペが言ふ。やがて狙ひは定められたか、一發の銃聲が暗の林に谺して響き渡つた。但し彈は逃れたか爆發の音は聞えなかつた。續いて一發又一發、數發の銃聲が連續して起つたが、最後に天地も崩れる計りな爆聲が轟いて、炎々たる暗紅色の火焔が物凄く四邊に迸つた。

◇裂帛の悲鳴◇

第一　勇士揃ひの鰐魚狩

一發の銃聲と續いて起るダイナマイトの爆音によつて、千古の森林は爰に不斷の沈默を破られた。

樹々裂帛の悲鳴を擧ぐると共に天に冲せる萬斛の土砂は急瀨の如き音を立てゝ降り來り、暫しは天地晦冥蒙々として咫尺も明かぬ暗の中に、怖ろしき破壞の叫喚が漲り渡つた。

『結果は什麼だ』と樹上から德川さんが叫ぶ。

『上首尾』とタンベが樹下から應へる。

『あの音で當分虎も寄り附くまい、この間に疾く作業に懸れ』と將軍の命令に、三人等しくショベルを携へて現場に駈けつける。而して彼の爆破し倒されたる、巨木の周圍に枯葉を集めて即時猛獸除の、火に焚かれた。火光を透して物色すれば、巨木は其根を拷ぎ倒されて痛ましき破壞の姿を横たへてゐる。そして四邊は一面の土砂に埋まつてその根方は一間ばかり掘れるが如く窄たれてゐる。三人の土人は懸命に

その周圍を掘り出した。僕と德川君は漸く樹上から辷り下りて彼方の現場に駈けつける。

『ヤレ〳〵最う大丈夫、旦那方はその焚を注意して消ぬやうにして貰ひてえ。火が消えると虎が來る』

タンベの號令で僕等二人は暫し火の番を承る。

恁くて約一時間の後に作業は全く竣つた。作業と言つても頗る簡單なものであつて、深さ一丈に底一坪ばかりな穴の上に太丸太の掩蓋を架けたばかり、一同は其底に火を焚き乍ら、一夜を爰に曉さうと言ふのである。

さて一同が漸と穴の底に落ち着いて見ると、今更に空腹を感じて氣惰るい事一通りでない。と言つて舟まで食糧を取りに行くのも、武裝して誰か護衞してやらねばならぬ。

◇武裝の護衛◇

そこで僕と德川君との間にヂャン拳が始まる。南蠻山中の穴の底でヂャンケンホイなぞは振るつてゐる。結局僕が負となつて、燃料と食糧の準備をするまで、穴の外で歩哨の大役を勤めねばならなかつた。怯くて一同が漸とパンと牛肉の罐詰にありついたのが、其の夜の九時過ぎであつた。然も其味まさ加減たらないのである。恁うなるとお互に冗談の一つも言つて見たくなる。

『食へ食へウント食へ。隨分皆に苦勞させた』と英語で言つたがタンベの外には十分に意味が通じない。

『德川さん馬來語で食へと言ふのは何と言ふ』と僕が訊く。

『マカン、タイ』と敎へた。

そこで一方の從者に向つて、切りにマカンタイを連發すると、是は意外、件の馬

來先生大に面を脹らして怒り出した。同時に德川君とタンベの兩人顏を見合してワハ、、、、と笑ふ。

『呀、これは變だ』如何に風習を異にしても世界到る處人情の異る筈はない。『食へと言ふのになぜ怒る』と僕も聊かムッとして怒鳴りつける。

『ソリヤ旦那が無理だ。旦那は先刻から糞を食へ〳〵と言つてゐる』

とタンベの說明で、結局德川君の惡巫山戲と判つて大笑ひ。

兎角するうちに睡魔は漸く穴の底に襲來して、一同ウッラ〳〵と覺束ない夢に入つたが、やがて外部に方つて吽へ號ぶ虎の唸り聲が聞えた。

◇虎群襲來◇

吽と響く虎の唸りは、夢と現の境に逍遙せる五人の頭上に霹靂の如き驚愕を齎らした。赤髭毛々のタンベが血眼になつて先づ立ち上る。續いて德川君と僕も無意識

に銃を掴むで立ち上つた。殘る二人の土人は氣も坐ろに狼狽周章きて、穴の底に迂路々々と立ち騒ぐ。

『馬鹿野郎、手前達は愚圖々々せずと早く火を焚かネーか』

タンべは血振ひしつゝ馬來刀を掴んで部下を叱り飛ばす。實際猛獸除の火は彼等三人が二時間交代で焚く事になつてゐた。然も前日來の疲勞と困憊から、當番のヨンナが焚火を忘れて寢入つたらしい。今迄五人が車座に寢そべつた中央には消え殘る一團の燠が人魂のやうに光つてゐる。そこで、ヨンナは早速枯枝を折り重ねてフツ〳〵と大汗になつて吹き出した。兎角するうち掩蓋の外では早や吻吻と言ふ虎の鼻息さへも聞えて、切りに穴を掘り立てゝゐるらしく、荒くれた足搔の音が聞えてゐる。

疾く疾くと急き立てるが、焦かれる程氣が狂つてヨンナは彌々狼狽て出す、恁うして漸く枯木に火が點くと青い煙が濛々として穴の底から這ひ上り、次いで一團の

火光がぱつと掩蓋の上に迸る。途端一聲物凄き咆哮と共に、穴の外數間を隔てゝ怖ろしき跳躍の音が聞えた。

『ソラ逃げた。虎なんぞ驚くにや當らネー』とヨンナがニヤリとする。

◇猛虎一聲山月高◇

『愕くにや當らネーが聞いて呆れらあ、手前が油斷から這麼事が起つたんだ。俺あ知らネーから貴樣朝まで火の番をしろ』とタンべが怒り出す。掩蓋を透して瞻上げると、月は玲瓏として中天に輝き穹窿は瑠璃の如く一碧に霽れてゐる。『猛虎一聲山月高かね』と德川さんが言ふ。

待合歸りの微醉機嫌の千鳥足に唸り出す山月は是程物凄くはなかつたが、此實景は堪らなく物凄い。

『お說御道理、詩なんてものは矢張り美人の膝を枕にして唸るもので、實際に味ふ

べきものでない』と徳川君が大に感心する。恁かる中にも虎の威吹きは掩蓋の彼方に尚斷續してゐる。然もそれが一頭ばかりでなく確に七八頭は居るらしい。彼方でも此方でも地震ひしつゝ起るのである。

『どうです旦那、憚りながらタンベが居なかつたら今宵の中に皆の命は亡かつたんで、抑も此掩蓋たるや、前米國大統領ルーズヴェルト閣下直傳の秘法で御座い』と當人大に吹き擧げる。但し

『獨木舟に飛び乘つて逃げ出すのもルーズヴェルト直傳かネ』

と突込まれて遁がにタンベも後は苦笑ひ、恁くて先刻の失敗に懲りた一同は、互に眠らぬ事として、徹宵談り曉した、劈頭タンベ得意のルーズヴェルト阿布利加猛獸狩隨行談から、次いでヨンナの初戀物語や、一方ソンサンの馬來民族の獨立戰爭未來談の大氣焔あり。さなきだに熱氣堪え難き深林の地の底で、間歇なしの焚火の焦熱焦煙に咽びつゝも、易々として彼等の無駄談を傾聽する僕等の苦しみは一通りで

はなかつた。然も掩蓋の上からは猛虎の一群が絶えず物凄き咆哮を浴せ懸ける。

◇山雞の歌◇

一架の掩蓋を楯とし一穂の燻煙を命の綱として、爰に一行は覺束なくも一夜猛虎の大群と戰つた。月が漸く西の彼方に沈んで、餘光が斜に森の懷を流れると、彼方此方の林中から、山雞の群が聲も朗に黎明の歌を唄ふ。

自然の聲である人の家に飼はれて、羽翼の退化したる家雞に較べると、如何にもその聲が自然の勇氣に滿ちたやうに聞える。果しもあらぬ千古の森の中に孵化されて、思ふがまゝに大自然の懷を翔り歩く、その自由とその無繫縛な生活は、彼の人間世界に囚はれて、不自然極る生を送り、而して、最後は殘忍なる刄の尖にその肉と骨を刻まるゝ、家禽から見れば羨ましいものであらう。然し彼等にも亦限りなき生の不安は伴つてゐる、巨木の空洞やラランの茂る叢間に生み落されたその卵が、

狐狸や、毒蛇の鋭き眼を脱れて、漸く母雞の抱擁から開放さるゝまでには、並大抵の苦勞ではないのである。タンベの談に聞くと、彼等が卵から孵化さるゝまでには絶えず牡雞が樹上にとまつて見張りをする。そして、此間掠奪者の近寄る事あれば直に樹下の牝雞に告げ知らせる。すると、樹下なる母雞は雛を抱へて高く空上に飛び上がるさうである。彼の極樂鳥は數十丈の巨木の頂上に穴を穿ちて卵を生むが、山雞は時に地を穿ちて卵を生む。生ある限りは何處へ行くも生存の競爭は演ぜられつゝある。而して強食弱肉に對する弱者の防衛は神が自然に敎へてゐるものと見える。餘談は措く。

◇再生　再生◇

山雞が所在の樹間に啼き立てると、霧は一入深く立ち罩めて掩蓋の外は又々濃き乳白の幕に掩はれた。それから更に二三時間虎群は我等の頭上を去らなかつたが、

軈て朝霧が徐々と薄れゆくと共に、何時となく彼等の跳躍と咆哮のひゞきは遠くなり、そして遠く遠く森の奥に唸りの地震ひが消えて行つた。

そこで漸く一同が安堵の胸を撫で下して朝餉の準備に取りかゝる。掩蓋の一部を撤して先づタンベとヨンナが這ひ上る。前なるが罐詰の空罐を五六個携へて水を汲みに行くを、後なるが武裝して、護衛するのである。暫くすると彼等は息急き乍ら歸つて來た、そして

『旦那早く飯を食つて出懸けませう。あの曲水の處に鰐が澤山浮いてゐる。有何夜が曉けてお陽さまさへ出たら此方のもので、恐らく今朝は大漁だ』と語る。

『よし來た』と德川君が躍り上る。僕も續いて出陣の用意に取りかゝる。從者の三名は大急ぎで罐詰肉を燒き温めて朝餉の準備をやる。狹つ苦るしい穴の底で五人が大汗の大活動、淋漓たる熱汗を滴しつゝ漸く食事を終つて一同掩蓋の外に這ひ上ると、黎明の風が氣持よく森の底から吹き起る『再生々々』とタンベが勇躍する。成程

再生に相違ない。今更に眴せば、掩蓋の四周は一面に踏みしだかれ、掻き上げられて虎の趾跡が間斷なく印せられてゐる。

◇水上の怪影◇

滟瀲たる紺碧の波の上に、ミルク色の霧がしつとりと蔽ひ懸り、波と霧とが相擁して私語く邊りに、黝黑い怪物の影が墨繪の樣に浮んでゐる。而して其怪物が三三伍々寄つては離れ、離れては又寄り、且つ浮き且つ沈む。それが鰐と思へばこそ物凄く怖ろしいが、同じ半島を遶りて續くベンガルの海に魔の女とは呼ばるゝが、多數の妖艶な人魚が浮ぶ。其人魚と思へば詩にもなる。醜惡にして兇猛なる鰐と雖も離れて遠く眺むればこれ又畫中の物であつて、南國の自然美に一抹の色彩を點せるものである。

『ロンリー、スイートと言ふ言葉があるがあの森林を遶る曲水に遊ぶ鰐の姿も恁く

遠くから霧を透して眺めると美しい。恐怖の中にも美はあるものだな』と德川さんがイヤに詩人振つた事を言ふ。やがて一行舟を艤して又々ジョホールの川を遡る。水は碧に風輕く遠方の山路は銀色の霧に打煙りて、森の陰影のみが茫乎として浮いてゐる。而して空や東の目路の果に一抹水天にかけて紅を呈せるは、今し朝暾の雲が燬くところ、一羽の翡翠が水を掠めて、此方に飛ぶ。宛としてこれ一幅の南畫である。而してその南畫のうちに今し我等五人を乘せた獨木舟が忍ぶが如く、徐々と漕がれて行く。背景もよく題材も極めて好いが惜しかな、さて何事の無風流ぞ。銃を携へ馬來刀を佩きたる舟中五人の荒くれ男。

◇亂射亂撃◇

恁くて舟が漸く現場を距る三十間ばかりの處に着くと、宛も浮島の如く水中から生ひ茂つたマングローブの杜がある。タンベは此處に舟を繫いで、暫し小首を傾け

た。

『浮いてゐる奴は撃ち惜いもんだが旦那やつて見るかネ、よし命中つたところで獲物は晩でなくちや浮いて來ない』と言ふ『構ふもんかドンドン撃つて置いて晩に拾ひに來るサ』と德川さんが言ふ。

『ぢや遣るが可い。だが打つなら横から鰐の腮を狙つて水平線の處をやりなせえ。甲や背の後半身ぢや彈が降るほど中つても一向駄目』と注意する。諸とばかり德川さんは早や銃口を彼方に向けて狙ひを定める。

『タンベ亞布利加以來の技倆を見せろ　と僕は銃を彼に渡して樹に攀ぢる。

『旦那撃らネーのか』とタンベが怪訝な顔をする。

『厭だ鰐なんぞ撃つたて詰らない　と僕は逃げる。但僕の銃に對する技倆たるや讀者先刻御承知の通り、實を申せば雀嗾しにもならないくらゐ、ただ鰐狩と言ふ名目に對する義理と、申譯にこゝまで拳銃と、モーゼル獵銃を運搬したのである。一

方タンベは久し振りに最新式の獵銃を手にしたので、悦ぶ事限りなく『有難う〳〵』を連呼して氣勢ひ立つた。

序に言つて置くが英國政府は其殖民地及び保護國に於ける土人には決して新式の銃を持たせない。

兎角するうち、德川少尉は早一發を切つて放した。次いでタンベも又發射した。

◇水底の唸、聲◇

群り浮ぶ鰐魚に向つて數發の銃聲が連續して起つた。と水は數條の龍卷を擧げて天に冲し、霧は遽しく空に迷うて、逆卷く怒濤が海嘯の如く舟を襲うた。そして水の底深く物凄い唸りが聞えるし然も其の聲は宛ら牛の遠吠を聞くが如きものである。

『巧い。確かに命中つた』

とタンベが叫んだ。逆巻く波と、水底の陰りは暫時の間やまなかつたが、軈て夫等がおさまると後は以前の如き靜寂に歸つた。そして四邊は閒寂として更に深い沈默に落ちた。

『鰐でも陰るもんだね』

と僕は今更に驚きと怖しさに戰いた。とヨンナが背後から突然奇聲を發した。

『旦那、見なせえ彼方に、ホラ彼方に一匹打ち上げられて居る』

指示す彼方を眺めると、成る程曲水の渦く對岸に當つて、一本太い古木の下に、岩の如く半身を突出せる黑影がある。後半身は水に溷つて居るので肉眼では確かにそれとは判らぬが、双眼鏡裡分明に認められる。

『畜生、跳ね損ねたな』

と云ひ乍ら更にタンベが一發放つたが、彼の黑影は微塵も動かぬ。

◇掉尾の一振◇

『大丈夫死んで居る。ヨンナ、貴樣行つて皮だけ剝いて來い』

とタンベが命ずる。『合點だ』とヨンナはソンサンを麾いで仕度をする。やがて僕と德川少尉と、タンベの三人は、マングローブの杜に殘され、二人は獨木舟を操りつつ遠廻りに現場に近寄つた。杜とは云ひながら、我等の取殘された處は、深き水底から生へ上つた杜であつて四周は勿論、足の下は怖しき鰐の潜む浮島である。そこで三人は力限り枝に取縋つて舟の歸りを待つのであつた。一方ヨンナとソンサンは現場から一町ばかりの陸岸に舟を捨てゝ、二人は忍び足に近寄つて行く。

『オーイもう一發擊つて見ろ』

と向ふから叫ぶ『オーイ』と應へながらタンベが續けて三發擊つたが、件の鰐は動かない。

『大丈夫だあ、斃つて居るぞー』

とタンベが言ふ。そこで二人はまたそろ〳〵と近寄つて行く。先頭に立つたヨンナは、例の馬來刀を打ち振りつゝ一歩々々荊棘を拂つて進む――。斯くて兩人が漸く現場に近着いて僅々數歩の處に踏み止つたと思ふと、突然彼の黑影の後半身が斜に空を薙いで横に拂つた。同時に颯とばかり白沫が四邊に迸る。呀つと言ふ間にヨナンの悲鳴が起る。刹那、彼の黑影は搔き消す如く水底に潜つて、後には悲鳴を擧げつつ浮き沈みせるヨンナの痛ましき姿のみが殘つて居た。

◇哀れの犧牲◇

斷末魔の悲鳴を擧ぐるヨンナの痛ましい姿が碧潭に浮んだ時。此方の樹柯に縋れる僕等三人は氣も轉倒せんばかりに驚いた。而して驚破と言ふ間に黝黑い怪影が復もや水の底から浮び上つて、颯と水煙を擧ぐるよと見る間に、ヨンナの姿はスルス

ルと辷るが如く水に沈み去つた。

『畜生ッ〳〵』

と叫び乍らタンベは狂氣の如く樹上から銃を亂發し、德川君も亦彼の水面目懸けて彈丸の雨を降らせた。併し死せるが如き深潭の水は、僅に漣々たる波を起したのみで、後は深沈として微との音も無い。而して三人は放心した如に互に顏を見合せたが、誰ひとり言葉を發するものもない。波打つ胸の動悸によつて縋れる樹枝がビクビクと振動するので、紅い血のやうな合歡の花瓣がポタリ〳〵と水に落ちる。するとタンベがワツと聲を擧げて泣き出した。と對岸の樹影から同じくソンサンがワツと泣く。

自分等三人は此時までソンの生死さへも考へる餘裕を持たなかつた。ヨンナが水中に叩き落されると同時に、自分達の視線はヨンナの上にのみ注がれて、あの刹那ソンが如何にして危難を免れ、如何にして生きてゐたかさへも氣付かなかつた。そ

れと聞くよりタンベは樹上から泣き聲を振り絞つて叫ぶ。

◇友の弔ひ◇

『ソンサンそんな處で愚圖々々してゐちや駄目だ。疾く舟に乘つて逃げて來い』

恁う號ぶとソンは狐鼠々々と雜草の中に潜つたが、暫くすると彼方の舟の處に匂ひ乍ら姿を現した。疾く疾くと此方から焦き立てるが、戰々顫へ乍らやつて居るので纜を解くさへも容易でない。恁くて漸つと彼が此方へ舟を漕ぎ寄せると、タンベは樹上から、更に數發を舟の周圍に發射する。そして凝乎と水底を物色して居たが『此間に疾く』と僕等を急き立てゝ舟に乘せ、ソンと兩人が懸命に漕ぎ出した。振り返れば先刻ヨンナを呑み去つた鰐の淵は、宛ら死の勝利に微笑むが如く滟瀲たる銀波を揚げてゐる。恁くてタンベとソンの二人は物をも言はず漕ぎ拔いて二三丁遡江したが、やがて舟を停めて二人は舟中に跪いた。そして二人が何か切りに私語い

てゐる樣子だが僕には一向判らない。

『何の眞似だらう？』

と僕が不審の眉を顰めると、

『祈つて居るンだ』

と德川さんが言ふ。

――只今ヨンナが召によつて御許に參りました。神よ願はくば彼が身の上に榮光を垂れさせ給へ――

恁く祈りつゝ彼等は相擁して號泣する。それを聞いては僕等兩人も坐ろに憐れを催して、その場に茫然と立ち盡した。

兎角する內、陽は早や三竿に昇つてヂリ〳〵と燬きつく如く蟬の聲が杜の四邊に起つた。そして犀か野牛か、巨大なる動物が森の木の間に走るのを認めた。

◇生　死　一　如◇

ヨンナが一行の犧牲となつて、痛ましい屍を水底に沈めてからは、一同の勇氣頓に衰へて、誰一人口を利くものもない。先刻まで巫山戯たり歌つたり、子供のやうに無邪氣に騒ぎ立てゝ居た彼が、今は早や底ひも知れぬ深淵で、怖るべき兇猛なる鰐群の毒牙にかけられて、肉も骨も咬み碎かれて居るかと思ふと、互の胸には包み切れない悲哀がある。然も死骸を求むるに由もなく、そのまゝ此山中に見棄てゝ行かねばならぬ。舟を行りつゝ振返ると、彼方に遠く曲水の邊り、朦朧として煙る霧の中に彼が血塗れの姿を浮べて、『オーイ、オーイ』と小手招くやうな氣がする。

『厭だ〳〵、もう止して引上げやうぢやないか、徳川さん』

『呑、止しても可い』

『止しても可いつて、まだ遣れば遣る氣かネ』

『遣つても可い』

『遣つても可いぢや困る。兎も角も僕は御免蒙る。第一ヨンナの始末を其の筋へ届けなくちやならないぜ、夫れに死體も捜さなくちやなるまい』

『ぢや止して引上げるかね』

と將軍爰に到つて漸く同意を表する。それにしても之から引上げるとすれば勢ひ彼の曲水の處を通過せねばならず、迚も今日中には人家のある處まで漕ぎ着けられさうにもない。死ぬる思ひで此處まで來たが、是から又同じ危險を冒して返さねばならぬかと思ふと、身顫ひする程厭である。

◇天　運　に　任　せ　て!!◇

『タンベ、何とかして最少し安全な航路は無いか、そして此の近くに日本人の居る處はあるまいか』

『冗談もんですよ。旦那、こんな山奥に日本人が居て堪るものか』

とタンベがたしなめる。

地圖を開いて見ると、成程此邊に人家のあるべき筈がない。但し此の支流を迂廻して約十哩ばかり行くと其處には護謨の栽培地がある。

『此處だ、此處まで今日中に漕ぎ着けて、早速ヨンナの死體搜索や届けをやらねばならぬ。力一杯やつて見ろ』と命ずる。

『死體は迚も浮びますまい。今頃はもう木ッ片に碎かれて居ます。それに此の支流は尙更危險だ』

とタンベが言ふ。尙更危險でも仕方がない、同じ航路を返して同じ危險を冒すのは尙ほ厭だから、天運に任せて決行すべしと議一決、水筒からウヰスキーを呷つて更に一同蠻勇を鼓した。恁くてその場を漕ぎ出したのがもう正午近い頃で、天の一方には又もや鉛の如き雨雲が蔓りつゝある。生か死か、前途は甚だ心細い。

◇人喰人種◇

暗碧の水深く靜みたるチョホールの圜流は宛ら千古の死水を盛つて作れる暗渠の如く、兩岸の巨木は蠹々として千仞の岩壁を斫り連ねたるが如くに深い。深い深い森林の底に長蛇の如く迂盤り蜿蜒くる毒潭の水。その上に飄乎として芝の如き獨木舟が浮ぶ、これを一幅の繪と眺めて、第三者の地位から考へても淋しからう。さしてやその、獨木舟には纔かに鰐群の毒牙から免れて危く生き殘つた僕等四人が乘つて居るのである。往く往く餓虎の群と戰ひ、野象に嚇され、且つ毒蟒に阻まれ、さては强筋よく銑身を曲ぐると聞く怖しの猩々に包圍されて纔に萬死の生命を一縷に繋ぎたるなんど此の航程は僕等四人が半生の辛苦艱難を一蒐せるよりも、更に幾十層倍の苦しみであつた。而も遺憾乍ら紙面に限りがあるので、爰に詳細を記し能はぬ。

◇猩々と犀と◇

瘴霧を冒し蠻煙に咽び且つ灼熱の陽光を浴びつゝ四人が懸命に漕ぎ上ること約七哩、日は早や蒼茫として暮れんとし、暮色は幽々として森の下暗に迫つた。折柄行く途に當つて一艘の怪舟が矢の如く此方に向つて漕ぎ來るのを認めた。呀つと思ひつつ交みにレンズを向けて仔細に物色すると、驚くべし、件の舟には半身裸體の壯漢が七八名乘込んで何れも銃器を携へ刀劍を帶びて居る。然も其中には漆黑の髭髯茫々として容貌魁偉の怪漢が立つて荐りに部下を督勵してゐる。

『ソレッ、サカイ蠻族の首狩だッ』

と、僕と德川君が突ッ立ち上ると、タンベも驚いて立上つた。と見ると向ふでも早や射擊の用意をしたらしく、數箇の銃口が一齊に此方へ向けられた。一瀾踰ゆれば又一瀾來る。もう此時は一行の精も根も盡き果てゝ、迚も此上戰ふの勇氣は無い。

殊に此處まで來る間に於て、僕等は既に猩々との爭鬪で散々痛められてゐた……。森の奥で犀と猩々と格鬪して居る處へ、止せば好いのに、德川さんが鐵砲を向けたので大騷ぎとなつた。猩々の横ッ腹へ鋭い犀の突角が突き込まれて……オット之は此處では話されない。後廻し〳〵。

◇怪漢の誰何◇

首狩るサカイ蠻族の獨木舟は、僕等の舟を距ること約三十ヤードの處でピッタリと停止つた。

『ペゲ、マナ』

と主魁らしい髯だらけの壯漢がまづ怒鳴つた。ペゲ、マナとは馬來語で、『何處へ行く』を意味する。サカイ族が馬來語を使ふのは愈々奇怪なりと思つて居ると、タンベが同じく馬來語で何か言つて居たが、突然躍り上つてワハ、、と笑ひ出した。す

ると向ふでも一同がドッと笑ふ。

『それぢや貴君方は徳川さんと西川さんの御一行でせう』

と件の主魁は不思議に僕等の名前を知つて居る。然も流暢なる日本語である。そして、

『僕は鈴木イステートの櫻田です』

と説明した。櫻田氏なら僕も知つて居る。

『左様ですか、實は失禮ですが、サカイの首狩と思つて愕いた處です。場所が場所時が時ですから、御免なさい』

と大に詫びる。

『イヤ御同様で』

と向ふでも笑ふ。そして

『實は秋田のライオンさんが〇〇さん(亡命中尉)から御一行の御出發を聞いて報らせて呉れましたので、或はお目にかゝれるかと思つて居ました。それにしても此航路を行つては大變な方角へ行つちまひますよ』

と言ふ。

◇獅子の猛威◇

ライオンさんは南洋各地の日本人で誰知らぬものもない秋田所領地の支配人仲井氏の事で、同じく顔中髯だらけの人で、櫻田氏の兄弟分のやうな人である。此人數年前、或る夕方ヂョホール山中に於て一頭の猛虎に會したが、虎が氏の顔を一目見るより一散に逃げ出したと言ふ。爾來虎より強いライオンさんと云ふ處から右の綽名を附けられた。

餘談は措き自分等一行は之から櫻田氏の船に導かれて、更に一哩ばかり隔つた同氏支配のイステートに向ふ事となつた。往く〳〵途中に於てヨンナが鰐にさらはれ

た話や。それから此處までの冒險の數々を話した。すると、

『冒險と云ふよりも寧ろ無謀です、暴擧です、何にせよ、夫れつばかりの舟と人でよく此處まで生きて來られたのです』

と櫻田さんは大に感心する。

そして鰐や虎なら自分のイステートにザラに居るから座つて居ても獲れると言つたので、一同更に愕いた。それから虎が毎晩やつて來て鷄や犬をさらつて行く、時には一夜の中に二三十羽の鷄をやられる。その上虎が同氏住宅の階廊に飛び上つたり、鰐が炊事場に匂ひ込んだりすると聞いては彌々驚かされた。數日前も一頭の鰐が同地の用水地に潜んで居るのを發見し、石油の空鑵にダイナマイトを裝置して投入すると、鑵は一大爆音を發して轟然炸裂したが、鰐には一向に利き目無く同夜の中に又復愛犬一頭を奪ひ去られたと云ふ。

『案内されるのは有難いが、飛んだ物騷な處だな』と德川さんが小聲に私語いた。

南天にはメリッシュ彗星が微茫して尾を曳いて居る。

◇爆彈の炸裂◇

月の出潮に乘じて二艘の獨木舟は矢の如く駛つた。櫻田氏の舟を漕げる十餘名の壯漢は東京感化院から送られた不良少年の一團であるが、渡南後爰に幾年間南國の大自然と櫻田氏が懇切なる感化指導とを受けて今は各自幾十幾百の苦力を指揮しつつ、爰に千古の深林を拓いて、所謂南國の開拓者たる祖國日本の使命を果しつゝある。彼等の前身既に然り、然るが故にその勇敢なる點に於ては到底凡庸なる日本青年の比ではない。僕等の舟足が遲々として進まずと見るや三四名がバラバラと飛び込んで來て共に漕いで呉れる。恁くて一行十八名は勇しき日本軍歌を奏しつゝ南蠻山中の圜流を駛り行く。壯快眞に譬ふべくもない。

恁くて僕等が無事鈴木イステートに着いたのは黄昏過ぐる頃であつた。護謨の林

は鬱々乎として濃緑の葉を盛り。月魂遠く幽々として滿林の樹頭に煙るところ、暮夜の風寂々として霧を拂ふ。而して護謨の林を遶りて荒叢を境せる鐵條柵の邊りに於ては、時々物凄いダイナマイトの炸裂せる音を聞く。それは猛獸や野猪や鹿の襲來を防ぐべき自然爆裂彈であると櫻田氏が説明した。

舟は鈴木イステートの本部舍宅から一町ばかりの地點に繫がれた。

◇黒豹の咆哮◇

此處から僕等は武裝せる例の威化院生一同に護衛されつゝ上陸する。成る程このイステートは鰐が多いらしい。三方は水に圍まれて居る上にヂョホール支流の源泉が、帶の如く圍流して本部から一町ばかりなる炊事場の裏手を走つて居る。

櫻田氏の舍宅は同氏が最も意を注いで築造したものだと聞く。只見るコンモリとした小高き護謨の林の丘の上に、所有直線と、所有直角とを用ひて作されたるが如

く風通と採光と除熱と防水の加減が極めて巧に出來て居る。遙に望めば一見宮殿の如く、階樓に坐して眺むれば眼下に幾千英反の護謨林を俯瞰し得べく、用材が無盡藏なるだけに結構頗るよろし。殊に高價なる鐵木なども惜しげなく土臺に用ゐられてある。而して白蟻の襲來を防ぐべき塗料の香が、氣味よく嗅覺を唆る、本部舍宅には櫻田氏夫妻と令孃と、外に土人のコックとボーイの五人が住んで居るが、苦力監督たる威化院生の一團は本部から數町隔つた別舍に住んで居る。

『此麼物凄い奥深い、そして獰猛な野獸と蠻氣に滿ちた人間の多い山の中で、よく夫人が辛棒されたもんですな』

『妻は兎も角、子供の教育には頭を痛めます。學校は新嘉坡までやらなくちやならん。然も外人學校では日本語を教へないから、女の子などは實に厄介です』

と櫻田氏が言ふ。

森の奥では黒豹の嘷る聲がする。

◇殘月の一曲◇

三千里外異域の南蠻山中にゆくりなくも、相會し相救はれたる吾等同胞はこの夜洗ひ出す月の清興に歡談の盡くるを知らず、互にウキスキーの盃を擧げつゝ且つ語り且つ飲む。やがて團々たる滿月が頭上に懸り夜深うして興趣彌湧くの時、主人は秘藏の愛笛を取出して『殘月』の一曲を奏す。僕亦多年笛を愛するものから代つて追分の哀調を遣り、次で『凱歌』の曲を奏す、曳いて流し、流して吟すれば餘韻嫋々として森から森へ流れて消ゆる。消ゆる餘韻が嗚々漾々として森の暗闇に漂ふところ、時に突如として黑豹の唸りが起る。

『黑豹は虎より凄いと云ひますが、此邊は大分ゐるやうですな』

と僕が訊く。

『居るにや居ますが數に於ては虎の方が多い』

と主人が應へる。

僕等は茲で特筆すべき忠犬の話を聞いた。此處から數哩隔てる山續きに、スンガイリダンと云ふ處があつて、此處に吉井豫備步兵大尉(子爵今弟)の護謨栽培地がある。而してその山續きに內田泰造と云ふ人の椰子園がある。數日前の夕方右の內田君が吉井氏を尋ねての歸り途、突然一頭の黑豹が現はれて躍り掛つた。

◇忠犬の血戰◇

當時同君は警護の爲めに二頭の愛犬を連れて居たが、主人の危急を見て取つた右の兩犬は猛然該豹の左右から飛びかゝつて咬み附いた、恁くて猛犬と黑豹とは暫しその場に血戰を續けて居たが、やがて中なる一犬は無殘にも暴豹の牙にかけられて半死半生の體となつた。然も兩犬共に勇猛死を省みざる日本種の事とて兩々牙を鳴らしつゝ死の最後に至るまでもと血戰する。恁くて內田君は目前に二頭の愛犬が主

人の犧牲となりつゝ血に塗れて戰ふのを見乍らも、身に寸鐵を帶びざる事とて奈何とも詮術なく、氣もそゞろに迂路々々して居たが、此間爺犬は交互に主人を振り返りては逃げよとばかり悲鳴を擧ぐる。夫れと氣附いた内田君が一目散に逃げ出すと、彼の重傷を負つた一犬が最後の勇を鼓して豹の咽喉部目懸けて飛び蒐つた、この時疾く鋭き豹の爪牙は件の犬の後背部にかけられて無殘や其の場に引き裂かれた。而して殘る一犬は友の死骸を前にして暫し爭鬪を續けて居たが、軈て主人が多數の苦力を連れて救助に來たのを知ると同時に、氣も力もゆるみ果てたか、その場にバッタリと打倒れた。ソレと見るより苦力の一隊は遠卷に豹を取り圍んで銃を連發したので、道の暴豹も敵はじと思つたか、其儘森の暗闇に逃げ去つた。

恁くて一犬は死し一犬は瀕死の重傷を負うて主人を救つたと云ふ。

勇しき忠犬の話に夜は更けて一同漸く寢に就いたのは午前四時、裏手の森では深山鳥がコウ〳〵と啼いてゐた。

◇ヒマラヤまても◇

殺伐極る南蠻の物語には讀者諸君も既に大分飽かれた事であらうと思ふが。もう少し書いて後は美しい妖婉な魔性の女、佛蘭西少女の淪落物語や、さてはヒマラヤ山の中腹から亞弗利加のザンジバル邊りにまで遠征せる日本娘の紅恨な物語に移らう。

閑話休題、我等鰐狩の一行は、最初ヂョホール川沿岸を獵り廻り、次で馬來半島の中腹を横斷して、爰に最後の大冒險を敢てし、更に半島縱貫鐵道沿線に走りて、レンガム山中に於ける怪僧大谷光瑞師の所領地を訪問する筈であつた。爰には光瑞師が巨萬の財を抛つて護謨園を經營して居る。これを基本財産をして世界的轉法輪の大道場たらしめんとし、現に柱本瑞俊以下多數の小豆頭が自ら犂鋤を乘つて開墾に從事して居る。

その又地續きには長田秋濤翁夫妻が後半生の精力を込めて作り上げた一大護謨園もある。

◇憂國の海賊◇

飛んだ處で飛んだ話をする樣であるが序だから地下に眠れる翁の爲めに爰に聊か辨じて置きたい。翁はその全生涯を通じて社會から大變に誤解されてゐた。英佛留學時代一兎も角も、夫人仲子の華族女學校在學時代から、延いては紅葉館のお絹や神戸中芬の名妓ぽんたに至るまで、隨分艶物語も多い處から、宛ら一世の遊蕩兒の如く囃し立てられ、果ては政敵の揑造に係る例の露探事件などで散々誤解を招いたが、その實は耿々たる憂國の志士であつた。北守南進は翁が多年一貫せる不動の主義であつた。その證據には今日日本人が南洋に於て有する約十萬英反の護謨栽培地は翁がその先鞭をつけた結果である。翁が最初の希望ではまづ馬來半島に一大護謨

園を開き、爰に多數の青年を養つて自ら南進の實を擧げ、南進の指導者たらんとしたのであつた。然し翁の望みはその妹婿大倉信太郎氏の死によつて空しく崩壞した。無慮十萬弗の巨費を投じて成れる此の一大南進の策源地は、突如大倉氏の死によつて金庫の扉を閉ぢられた。

恁くて大正四年十二月二十五日、翁は播南垂水海岸の僑居に於て悲痛なる號びを擧げつゝ逝いた。曰く我南洋に一大海賊の主領たらざりしを憾む。我れ露探問題に於て無實の汚名を蒙りしを憾むと、翁は斯くて逝いた。而して僕等一行は、爰に翁の遺跡(當時は存命中で佛領柴棍に在つたが)を訪ふつもりであつたが、愕くべき飛報は此の朝霹靂の如く僕等の耳朶を劈いた。

曰く、新嘉坡に於ける大虐殺!

◇大虐殺◇

飛報の内容は極めて簡單であつて、バンチョールに於ける例の亡命中尉から今朝別仕立のモーターボートで報導し來れるもの、曰く昨夜新嘉坡に於て暴動起り、引續き大虐殺行はれつゝある。市中騷擾を極む。在留日本人は豫後備の軍籍に在るものを始めとして續々義勇兵を募りつゝありとある。たゞ判斷に苦しむのは大虐殺の三字であつて、それが何れの國人によつて何れの國人に行はれつゝあるかゞ不明である。何にせよ日本義勇兵を繰出しつゝあると云ふ所から推すと非常な大事件に相違ない。讀みつゝも僕等お互の胸は躍り腕は戰く。殊に德川君は豫備將校であるし、僕は旅券の肩書にも『戰時海外特派員』と明記されてゐる以上、これを餘所にして猛獸狩どころの騷ぎぢやなく、事は確に新嘉坡未曾有の大事件に相違ない。して見ると此旨至急本社に打電せねばならぬが、事によると經費を惜まぬ大阪朝日がもう拔打ちをやつたかも知れない。左樣すると日頃氣むづかしい編輯長から『辭表提出ありたし』などゝ打電し來つて僕の首がコロリと落ちる。內地なら平氣だが海外で

馘首されるのは少々應へる。

『困つたな』と僕が言ふ。

『困つたな』と德川さんが言ふ。

『困つたものです』

と櫻田さんも首を振る。

◇日本人鏖殺の檄文◇

時は恰も日支交渉問題が紛糾を極め、北京に於ける兩國代表者會見の模樣は、日々電報され、南洋一帶にかけて華僑の日本人排斥は物凄く行はれつゝある。殊に僕等の出發前は瓜哇に於ける支那人が獨探の使嗾によつて日本人鏖殺の檄文を配布しつゝありとの報道が達して居た。

『事によつたら新嘉坡の大虐殺はそれかも知れないな』

と徳川さんが言ふ。然し同地の革命黨本部には僕が日本語教師として屢々出入もして居るし、大きな聲では言はれぬが、藤井領事からも特別な便宜を計らつて貰つて事情の許す限りは黨員の動靜内情等も時々外務省に報告して居る。隨つて如何に煽動しても今遽に在留邦人に對して恁る椿事の起る可からざる事も知つてゐた。

『虐殺れて居るのは決して吾人の同胞ぢやない。或は印度の革命黨が蜂起して英國人をやつて居るのかも知れない』

と僕が言つた。と云ふのは新嘉坡出發の前夜、某印度の志士から聞いた言葉を不圖思ひ出したからである。

『果してそれなれば安心だ。安心と言ふよりも痛快だ』

と徳川さん、イヤ馬來人のタンペとソンが喜んだ。何にせよ僕等兩人は斯うしちや居られない。ヨンナの死體始末に就てはタンペとソンサンの兩人を殘して處置せしめ、僕等二人は即時件のモーターボートに搭じて全速力で歸途に就いた。

◇日本義勇軍出動◇

全速力をかけた快艇は風を切り波を衝いて矢の如く突進した。而して虎の棲む森林や、鰐の潜む碧潭も物かは、瘴煙蠻波を一蹴し去つて僅々一時間有半、即時バンチショールに上陸して例の亡命士官を訪ねると、果して新嘉坡の大虐殺は印度輕歩兵によつて行はれつゝある事が判つた。

『噂によると在留英國人殘らず虐殺た。婦人も小兒も一切お構ひなしに一齊射擊を食はせたそうです』と亡命子が言ふ。序に僕は新聞通信や海外電報が一切差抑へられてゐる事を聞いたので漸つと安心はしたが、何とかして逸疾くこれを日本に報道すべき方法を講ぜねばならぬ。折もよく新嘉坡行の通行汽船が下江して來たので、即時該船に搭じて歸朝の途に就いた。而して徳川少尉は何れ義勇隊指揮に任ぜねばなるまいが、それに就ても豫め半島在留の豫備將校諸君と合議すべき必要がある

と言ふので、亡命中尉の許に殘つた。

これから海上約七十哩、僕が船中氣の焦く事一通でない。併も船客の誰も彼も虐殺とか暴動とかの噂ばかりしてゐる。其上今日に限つて英人が一人も乘つてゐないので、中には思ひ切つて無遠慮に英國を罵つてゐるのもある。

◇白禍論沸騰◇

『白人でなくちや人間でネーやうに平常威張り切つてゐやがるのが癪に觸る。今日は奴等が泣え面掻く所を寛々と見物するかな』と如何にも痛快氣に言つてゐる馬來人もある。

『いづれ中華の革命黨も一緒に旗を擧げたらうよ、さうなればシャムやビルマの連中も無言つちや居られまい。日本さへ反對しなけりや是から世界は、有色同盟で固

ると云ふものよ』と、仔細氣に瓜哇の商人らしいのが言ふ。すると船客のすべてが申合せたやうに僕の方へ視線を向けた。と卒然背後から一人の巨漢が現れて、

『先生』と肩を打つ、先生と言はるゝ程の馬鹿でないと思ひながら振り顧へると、それは僕が豫て日本語を敎へてゐた中華革黨の劉劍俠であつた。此男は數箇月前まで佛蘭西の巴里郊外に居を卜し、張繼等と一緒に世を忍ぶ豆腐屋渡世をやつてゐた男、巴里ッ子が豆腐の味を覺えたのは此男等のお蔭である。

『大分面白くなりましたね』と劉君滿面に笑を浮べつゝ語る。

劉は黨員からの內報によつて昨夜以來印度革命兵の英人大虐殺に關する經過に就いて既に其大要を知つて居た。勇猛なる六百の印度輕步兵は最初獨人捕虜收容所を襲うてその全部を解放し、次いでアレキサンダーバラックの兵營を占領し、更に附近の彈藥庫と糧食庫をも占領してゐる。而して今夜中市街に向つて突擊を開始して英人全部を虐殺する樣子であるが、戰鬪は今朝のとこでは尙郊外に於て行はれつゝ

あつたと云ふ。

『君はどうしてそんなに詳しく知つてゐるんだ』と僕は餘りに其情報の速いのに愕いた。

『ソレは二三日前の未發期に於て既に僕の言へ通報がありました。委細はこゝでは話せませんが、今夜新嘉坡の陸遜山に(中華革黨本部のある處)皆が集まりますから來て下さい』と云ふ。

◇市中の戒嚴令◇

時は大正四年二月十六日

春とは言へど地は是れ四季を分たぬ常夏の南國である。暖風蒸々として龍王の並樹に薫ずる處、白日熾くが如き熱光を射て、人は宛ら釜中に煮らるゝの思ひあり。然も何事ぞ三十餘萬の市民悉く戸を鎖し業を罷めて屋内に潜居し、只見る大路小

路は銃劍着けたる英軍の將卒が氣もそゝろに駈け巡る。而して今し市街の滸なる英總督府官邸の裏手に方つて、宛ら豆を煎るが如き銃聲が連續しつゝある。

『成程これは事だ』と劉君は悠々として葉卷の煙を吹いてゐる。

『事だつて君さう緩々してちや困る。此分ぢや何時市街戰がおつ始まるか判らないさうなるとゝ迷つた印度兵ども序に吾々も射殺けるかも知れない』と僕が言ふ。

『否』と劉君は突嗟に之れを否定した。そして印度兵今回の蜂起は左樣に無秩序なものでない。相當準備もあつて、それには分別ある指揮者もあり、事を擧ぐるには餘程周密な用意をして懸つたに相違ない。第一歴山兵舎の食糧彈藥庫を占領した事によつても其れが察せらるゝ。それから獨人の捕虜收容所を襲つて、まづ彼等を開放した事など、迚も素人の手際ではない。萬一開放せられた獨逸將校が彼等を指揮する事になればそれこそ大變、新嘉坡は今夜中に全部占領せられる。則ち市街に向つて夜中突擊を行るに相違ない。併し吾々有色人種に向つては決して殺戮を遣

らない筈である。

◇印度の老志士◇

『或る意味に於て印度の革命黨は中華のそれ以上に人物も揃ひ規律も整つて居ますからな』と劉君却々の通を振り廻す。成程曾つては日本の士官學校に學んだゝけに彼の軍事的觀察は到底僕の及ぶ所でない。

恁く語りつゝ海岸通りを歩み行く中、先刻から英兵を滿載せる數十臺の自働車は相連れて前線に馳り去つた。次いで裝甲自働車が行く、救護隊が行く、少年傳令使がモーター自働車で走り去る。戰塵冥濛とは此事であらう。街頭は濛々たる黄塵が漲つて行人悉く是れ戎劍の人である。

劉君の説明を聞くに及んで、自分は此時偶と心に思ひ浮んだ事があつた。それは過日印度の豪商○○○○○○氏の夜會に列した時、當夜同席の印度學生ブラハッタ

から聞いた印度革命の老志士カッシムビン、イスメール、マンソール翁の事である彼は今市内テルファイフ術に高層なる邸宅を構へ、更に市外五哩程の別莊地バセバンヂャンに一大護謨園を經營してゐる。勿論表面は印度の富豪にして年老ひ財足りて、一向俗事を顧みず、悠々風月を伴とせる一老翁の如きであるが、時々彼の邸宅に出入せる者の中には中華革命の青年急進黨員やさては在米印度革命黨中最も過激派と目さるべきガートル一派の青年がある。それのみならず米國より印度本國に歸還する印度の青年は途中必ず新嘉坡に寄港して翁を訪問するを例とする。更に不可解なるは日本人の訪客に對しては其の何れの階級、何れの職業たるとを問はず事の外厚く歡待するの一事である。――恁く感じ來るの時翁と今回の革命亂との間に何等かの脈絡が有り得可く感せらるゝ。乃ち僕は倉皇として辻馬車を命じ一路バセバンジャンへと急行し、劉も亦陸遜山の同志會合所に急ぎ去つた。

◇英人の狼狽◇

昨夜以來新嘉坡の市中は勿論附近郊外から全島にかけて戒嚴令は布かれ、在留英人中男子は悉く義勇軍に徵集せられた。大路小路の往來は絶えて町の辻々はひつそりとしたものである。而して所在の十字街頭には十六七の少年や六十過ぎた老人が、さも心細氣に銃劍を擬しつゝ立つてゐる。勿論彼等の多くは突嗟の間に馳せ參じた事とて、大抵は素服の儘で、背廣もあれば詰襟もあり、さてはグラウンドから其儘駈け着けたらしい運動服もあり、中にはフロック姿の義勇兵もある。成程昨日の動亂發生日は日曜であつた。

僕は車上から是等の狀態を觀察して、如何に昨日來英人の驚愕と狼狽の甚しかりしかを想像した。而して三十萬の市民悉く交通を遮斷せられ、途上絶えて他の人影を見ざるが中に、單り日本人たると新聞社の戰時特派員たるを以て、僕のみ自由に

横行し得らるゝの矜に頗笑んだ。のみならず、日頃驕慢なる英人が、今日に限つて到る處僕に握手を求めては愛嬌をふり蒔く。常ならばルー(貴樣)とかヂャップとかの無禮極る侮蔑的、代名詞を以て呼びかける雜輩官吏やさては士官輩が、

『ハロー、マイ、ダーリング』と來る。

或は『友よ』と呼ぶ、更に甚しきは諄々しく日英同盟の効能を陳べ立てた揚句、『だから君等日本人と僕達英人は兄弟だよ』などと頗る御念の入つた御世辭もあるお世辭くらゐなら我慢もするが、中には女房の所在を探して呉れの、情婦に傳言をして呉れのと言ふ。聞いて見ると昨夜中に暴徒が市街に突擊を行るかも知れないと言ふので、婦人小兒は悉くヂョンストン棧橋から英國汽船に避難せしめた。その時最後のキッスを仕得なかつたのが殘念だなぞと隨分な惚氣である。

後で判つたが昨夜ヤング總督は、無線電信を以て日本艦隊に來援を求めてゐた。

◇警戒線突破◇

餘談は措く。恁くて僕は途中幾度か英國士官や歩哨から誰何せられたが、漸くにして非常警戒線を突破し、無事バセバンヂャンの海岸なる前記マンソール翁の別莊に着いたのは既に午下であつた。

因に言ふ、當日僕と翁とが會見せる次第、及翁が談話の内容は斷じて他に漏さゞる可く當時固く誓約したのであつたが、其の後外電の報じたるが如く、翁は果して印度革命の首領であつた。而して同年四月二十三日英國海峽殖民地高等法院に於て檢事アベリス氏から銃殺を宣せられ、間もなく刑場一發の銃聲と共に渾身三斗の義血を吐いて倒れたのである。從つて最早當時の誓約を爰に嚴守すべき必要もなくなつた。乃ち以下記述せんとする所は、赤裸々なる翁と僕との會見顚末である。今にして思へば是れ翁が刑場の露と消ゆる六十餘日前の事で、翁と僕とが最初にして且

つ最後の會見であつた。

◇神の如き人◇

青螺碁布せるリオの群島を一望の下に眺め、遠く水天の彼方に、名も知れぬ水禽の群れて翔べる、近くは椰子の實を運ぶ土人の獨木舟が、遲々として揚樹皮の帆を擧げたるなんど、平和に長閑なるバセバンヂャンの海岸も、今日は何となく不穩の氣配が漲つてゐる。先刻まで飄々として天際に浮んでゐた雪白の積雲は、やがて魔の如き鉛色の入道雲と變じて重々しくも海面を壓し、渚に寄する波の音は遽たゞしく高鳴り出した。

『トワン、ショウワア、バレ、ラ』と馭者は二頭の馬に鞭を呉れつゝ全速力で駈け出した。『旦那驟雨だア』と叫ぶ馭者の言葉を聞いた時に、不圖僕は其のアクセントの中にヒンヅー語の餘韻を聽取した。はてなと思つて今更に馭者の顏を見極めること

果して夫は印度人であつた。『ルー、タウ、チダ、ルマ、トワン、マンソール、』と卒然マンソール翁の屋敷を聞くと彼は言下に、『エー、知つて居ますとも、大知りだ』と應へる。而して行く手に見える鬱々たる護謨林を指差して、あの中に大人の別莊があると説明した。

口善惡なき辻馬車の馭者にして、尚翁を呼ぶに大人の語を以てする所を見れば、翁の同國人間に於ける信仰は到底尋常の事ではない。又單なる富豪のみに非らざる事も察せられる。乃ち僕は行く〳〵彼に就て翁の人物性行等を問ひ質さんとしたが馭者は翁の事に就ては他に一言をも發しなかつた。何を聞いても『存じません』一點張りである。而して『神の如き人』とのみ附加した。

◇激戰中の會見◇

波は渚邊に打ち騷いで雪の如き白沫を飛ばし、連る一帶の白砂と、白砂に生ひたる椰子の林は宛ら浮島の如く眺めらるゝ。开してその椰子林につながつて幾千英反の護謨林が展開し、目路の限りは濃綠の蔚林である。成程大望を抱いて雌伏せんには之れ屈强な處、此林中に馭者の所謂神の如き人が隱棲してゐるかと思へば何となく崇高の感に打たれざる能はざるものがある。

恁くて馬車が漸く同園の入口に達すると、突然園中から一人の巨漢が現はれた。現はれた巨漢はバンガリー族と見えて身の丈七尺にも餘るべき容貌魁偉の壯佼である。而して右手には太き檳榔の棍棒を提げながら凝乎と怪し氣に車中を物色する。漸く僕が車から降り立つて握手を求めると、

『失禮でありますが貴郎は何誰で御座いませう』と意外にも流暢な英語で訊ねる。

然も僕を日本人と見て取つてからは、極めて面色を温げながら甚しく丁寧に口を听く。そこで僕は翁に面談したい事及び急ぎの要件であるから紹介狀を用意して來なかつたこと、日本の新聞記者である事、蘭貢の富豪ジャマル氏や、新嘉坡のアン

グリアン氏などと懇意な事抔を告げた。すると彼は暫く腕を組んで考へてゐたが、最後に、

『翁は留守かも知れませんが、一寸念の爲め伺つて參ります』と言つた。而して件の馭者と自國語で暫く應答し合つた上句愴惶として園内へ駈け込んだ。然も此間右の馭者は僕を監視するかの如く、儼然として僕の面前に立ち塞がつた。

遠く新嘉坡の市街では機關銃の響が連りに聞える。

◇刺客防衛策◇

待つ間程なく件の壯漢が再び現はれた。而して先刻應對の時よりも更に其態度が慇懃であつた。雙手を擎げ腰を跼め頭を下げて、所謂鞠躬如たる擧動である。

『主人がお出迎へする筈でありますが、數日來微恙で臥つて居りますから私が御案内致します、尙失禮ながら病室で御面會致しますので、主治醫の注意に依りまして

外來の客は何誰に限らずお召替を願ふ事になつて居りますが如何で御座いませう』と、

恁く言ひながら密と僕の顏を流し眄に瞻げた。微恙で臥せつてゐる者の病床へ近づくのに、着物を着替へねばならぬと言ふは頗る變である。成程僕は外來の客には相違ないが此處へ來る途中別に傳染病の流行地を通過した譯ではない。最初此言葉を聞いた時甚しく奇怪に感じたが、後に至つて僕は初めて其意味を合點し得た流石は印度の興廢を雙肩に擔つて立つだけの老志士である。三億の同胞を救濟せんとするには一方には更に多くの敵を有つ。乃ち彼が用意の周到なる、初對面の客には、先づ着衣を更めしめて兇器の有無を探るのである。勿論僕は此提言に對して、之を拒むべき必要はない。即座に『諾』と答へた。そして導びかるゝまゝに護謨の林中を行く事約半丁、其處には、椰子の葉葺の小屋があつて、中には早一人の小僮が白絹の替着を捧げつゝ待つてゐる。替着は薄くして羅の如く一見日本の着物の如き

ものであつて、帶の代りに紐が着いてゐる。即ち僕は上衣と洋袴を脱いで小僮に預け、襯衣の上から件の替着を引きかぶつた。

夫から約三丁ばかり右に折れ左に轉じて林中を歩み行くと、其處に煉石と鐵木を以て建てられた三層建の洋館があつた。翁の隱棲所は則ち此處である。瞻れば樓上には更に高さ數十丈の望樓を設へ、臺上には望遠鏡の設備さへもある。そして今し數名の印度人が荐りに海上の彼方を眺めては赤き布片を振りつゝある。

◇美少女の案内◇

恁くて漸く玄關口に到ると、案内の壯漢が長く短く三度び電鈴を押す、すると屋内から洋裝せる十三四の可愛らしい一少女が現はれた。印度人と言へば直ちに長軀痩身の黑奴と聯想するが、三億の民衆悉く黑人ではない、中には歐米の白哲人も三舍を避くべき白面の美丈夫もあり、さては綠髮紅顏の美少女もある、而して今し

玄關に立ち現れた少女は洵に日本にも珍らしい程の美少女であつた。併も流暢なる英語を操つて曰く、『老爺汝を待ちつゝあり』と。

それから少女に就て階段を登り、二階に至つて、更に幾度か階廊の角を折れ巡るそれから再び階段を降りると其處に相對せる二脚の安樂椅子があつた。少女、乃右の椅子に僕を招じて自分も一方の椅子に腰を据す。而して彼の椅子の背部に設けられた電鈴に手をかけたと思ふ刹那、驚く勿れ二つの椅子は客を乘せたるまゝ徐々として音もなく地下に向つて下降する。

『吃驚なさつたでせう』と少女は微々として笑つた。

◇志士の搖藍◇

アー、サー、ヤング卿の謂へるが如く南洋は眞に革命兒の搖藍であつて且つ國事犯者の巢窟である。世界三十幾ケ國の亡命子が爰に相寄り相援けて以て各自が回天の

偉業を成就せんと焦慮せる處、渺漫たる大洋の中に點々星の如く碁布せる島嶼の影には、幾多泣血の志士が雌伏して天下の風雲を望みつゝある。一は即ち海波靜穩にして帆航の便あり。小舟宜く諸島を巡り得て各地の同志と往復するに宜しく、一は氣候不變の地たるだけに生活の極めて容易なる。蕭々たる椰風肅々たる蕉雨は以て欝勃たる亡命の悲憤を遣るに宜しきが故であらう。それかあらぬか中華革命黨の杜鵑兒孫逸仙は一度布哇に起つて策を海峽殖民地に樹て、一時は同地ミンドルロードに潜伏して事を謀り、同じく陳烱明はリオの群島に潜みて機を窺つた。而して彼の印度の革命も亦此處に萠芽を發して、遠く米國に於て培養せられた。

恁くの如くにして南洋、就中其中樞地たる新嘉坡は極めて多くの危險分子を抱擁してゐるのである。從つて海峽殖民地總督の是等に對する取締たるや頗る嚴密なものであつて、自國人を除くの外何れの國人たるとを問はず、十人以上の男子が會食する場合は必ず其筋の認可を要すべく、更に家屋取締の嚴密なるは眞に驚くばかり

如何に場末の小家屋と雖も、必ず圖面を作製して當局に保管し、假令小棚一つの取附に際しても圖面添附の届書を提出せねばならないのである。

◇卓上の無線電信機◇

然るに今マンソール翁の別邸に來て見れば、邸内の構造驚くばかり複雜なるのみならず、這中又幾多の秘密室を有するらしい。而して更に僕が一驚を喫したるは、今し降り立てる地下室内の善美極まりなき結構と室内の裝飾の至れり盡せる點である。眴せば十疊ばかりなる石造の室内は中央に大理石の圓卓を構へ、卓上電話あり無線電信機あり。更に一方の壁間には極めて細密なる世界地圖を掲げ頭上には煌々として電燈が輝きつゝある。而して尙驚く可きは件の少女が再び電鈴を押して昇騰し去りたる刹那、室内の電燈一時に消えて四邊は眞の暗となる。然も其瞬間今迄それと氣附かざりし卓上尺餘の鏡面が炳乎として輝き、而して其鏡面には、前面一帶

の海上から邸宅の附近一圓にかけての光景が躍如として浮動し來るのである。如何に黄白を惜しまぬ富豪の別邸とは言へ、恁くの如き地下室と、恁の如き設備を道樂にすべき筈はない。

さても奇怪、奇怪なりと心に訝りつゝ其處に呆然として彳立する事數時、軈て沛然として降り注ぐ驟雨の光景が例の鏡面に現出せられたと思ふと、俄然室外に消魂しき電鈴の響が起つた。

◇秘密室の構造◇

怯えたやうな電鈴の響　森沈として底深き幽暗の地下室に鳴り渡り、呼吸苦しく鉛のやうな空氣に波打つて聞ゆると思ふ刹那、僕の彳立る背後の扉が靜かに音もなく開かれた。と卓上の豆電燈がポッチリと小さな光を放ち、其處に立てる翁の姿が朦朧として影の如く浮び出でた。

年はもう七十位でもあらう。長身痩軀にして白銀の如き長髪を背後に垂れ、同じく銀髯長く伸びて胸に及ぶ。而して烱々人を射るが如き雙眼が凝乎と頭上から僕を瞰下しつゝある。白髪童顔とは此事であらう、冒すべからざる威嚴の中に、何となく人を魅するが如き溫容を備へてゐる。

『久しくお待たせ致しました。』斯く言ひつゝ徐に僕を招じて席に着かしめ、自らも又相對して椅子に靠る。沈着なる其擧止態度と、鷹揚なる物の言ひ振りが如何にも凡ならざる翁の人物を現してゐる。夫から翁は更に口を切つて、『失禮でありますが私は自國語と英佛獨露西の外に日本語は極めてお恥かしい程度にしか存じませんそれで成る可く英語でお話を願ひたい』と、

翁が少壯時代から西歐各國に亡命的生活を送つて、終始一貫主義の宣傳と、自國の救濟に努力し來つた事は聞いて居たが、僕は夫ほど迄に翁が各國語に通じてゐる事は知らなかつた。然し彼は一向に誇り氣もなく又皮肉にもあらず。極めて眞面目

に先づ外客の僕に對して用語の便を計つた。而して言ふ、

『老爺は貴郎のお名前を好く存じてゐます。○○○○に對して深き同情を有つて下さる事は豫て友人どもから承はつて居りました。然し今日は餘り突然で而して場合が場合で……』と暫く語を斷つた。それから更に語る。

◇婦人革命家◇

『老爺に對する最後の時は近づきつゝあります。從つて今後再び貴郎にお目にかゝる事が出來得るかどうかも疑問であります。私は之を機會として聊か從來懷抱し來れる私の希望と、而して之に對する運動の徑路を打ち開けて御批評を願ひたいと思ふ。但しこれは決して他に漏らして戴いては困ります。私が最後の告白は勿論今日此處に貴郎と會見した事も絶對秘密にして戴きたい。尤も老爺が土となりたる後日に於て貴郎が差支ないと思召した時は此限りではありません』

翁が斯く冒頭に置いて將に大志の一端を語り出さんとするの時、又もや頭上の室外に於て電鈴が鳴つた。そして年の頃二十前後とも見ゆる。美しき白面の一婦人が現れた。此婦人こそ今年八月二十七日巴里の軍法會議に於て死刑を宣せられたるマタ、ハリー嬢にして、蘭人を父とし爪哇婦人を母として生れたる女丈夫であつた。而して嬢は襁褓の頃から翁に養はれ長じては世界有色人種大同盟の主義を唱へ、最後は巴里劇壇の花形とまで謳はるゝに至つたが、遂に獨探の罪名を負うて銃刑に處せられた。それは獨人を利用して印度の獨立を圖つたからである。

◇老翁と天女◇

海拔一萬二千尺、巍々乎として雲表に聳ゆる爪哇スメローの雄峰は、今尚焰々たる萬丈の活火を擧げて天を爍きつゝある。而して之を背景として極樂谷の谿谷は、高低迷々千古の欝林を擁して横はり、此處にブロボドル大寺院は半ば碧蘿に掩はし

つゝ、深沈として不斷の沈默を守りつゝある。

鐘は鳴らず、人は言はねども月明の夜々此處に奇異なる一老翁と天女の如き白衣の婦人が相會し、何事かを密々相謀りつゝありとの風評は、疾くもヴァタヴィヤなる蘭領總督の耳朶に觸れた。然るに右の老翁は此時卒然として姿を消し、白衣の婦人も亦雲の如くに影を潜めた。

而して右の老翁と言ふのは彼のマンソール翁が莫逆の友にして、モハムダッハと呼べる老聖者、又白衣の婦人こそは今僕の目前に立てるマタ、ハリー嬢の生母であつた。話は聊か岐路に入るがマンソール翁とモハムダッハ老聖とは恰も楯の兩面の如くにして、最近印度革命史上に現はるべき人物中最も密接なる關係を有する、從つて後者の人物に就て茲に暫く語らねばならぬ。

老聖は西曆千八百五十七年五月八日中印の都市デリーに於て事を擧げたるモゴル王ムハムメッド、バッヂール、シャーの大革命に際し遠くバミールの山中より現れ

出でゝ畫策大に努めたるの士、然も天なる哉、遂に事成らず脱れて恒河上流のアラックフール山中に隱遁の身となつた。

◇英國の統印策◇

恁くて翌年彼の東印度會社は印度の統治權を英政府の手に委ね、有名なるカニング氏總督となり、スタンレー氏事務大臣として彌々侵略主義を實現するに至り印度人に對する壓迫は益々甚しくなつた、而して爾來二十年間東緬甸の方にあつてはベンガル、アラカン、アサムの各州悉くを領有する事となり、同千八百八十五年ヴイクトリア女皇は印度帝王の名を以て全印の地に政令する事となつた。

爰に於てか一度隱遁して聖者となれるモハムダッハは、遂に火の如き愛國救民の志に驅られて、アラックフールの出廬を敢てするに至つた。――餘は爰に敢て語るまでもない、主義の相等しき者が會すれば彼此相共鳴するは必然の理である。乃ち兩

個の老革命家は互に死を決して印度の救濟を誓つたのである。

但し此二人が、如何にして如何なる機會によつて、相會し相誓へるかに就ては、他に何事も僕に語らなかつた。唯マンソール翁が世界各國の有色人種間に配附せる『日本の勃興と有色同盟』なる著作の中に屢モハムダッハの名を記せる所より推して察するに、同書の出版前一兩年即ち千九百年前後緬甸ラングーン郊外の一寺院に於て會見せるものゝやうである。

◇血書の遺書◇

印度三億の同胞をして束縛の鐵鎖より脱せしむるか、然らずんば死あるのみと決心せる、マンソール翁の燃ゆるが如き愛鄉の念は、發して熱烈なる革命宣傳の筆となり、主義提唱の雄辨となつて、國内到る處に同志の出現を見るに至つた、恁くて救民と愛鄉の念に凝り固まれる翁は、南船北馬各地に遊説して席温まるの暇もあら

ず、其後錫蘭島に於て翁が同志を糾合せるの眞最中、突如として其嚴父が病氣危篤の報に接した、乃ち倉惶として西印の鄉里に歸り來れるの時、既に翁の慈父は死因不明の亡骸を冷やかなるベットに横へ、最期に望みて記したる一通の遺書はシーツの下より現はれた。然も其遺書たるや尋常一樣の物に非ず、白きシルクの手巾に、赤き血汐の滴りを以て『自由を求むるものは死を恐れず』と梵字を以て記されてゐた。

父君の横死によつて翁の決心は彌々鞏固となつた、遺骸を葬り終るや翁は直ちに鄉里を發して英國海峽殖民地の本據たる新嘉坡に渡航し、父の遺產一億萬弗は其全部を擧げて、主義の宣傳に充つべく、まづ同市テルファイフ街に宏大なる邸宅を構へ、更に此處バセバンジャンには別邸否秘密會合所を兼ねたる大護謨園を經營し、尙も其筋の疑念を脱する方便として日米易貿の大商會を起したのであつた。

恁くて準備漸く成るや、先づ同地に駐屯せる印度輕歩兵に對し、徐々として主義

の宣傳を開始し、軈ては自分も宗教講演に託して、馬來ステレッガイドの兵營に出入する事となつたが、一念の迸る所宜く諸兵をして愛鄉自立の心眼を達開せしめ締盟の同志は日一日として多きを加へ來つた、而して日曜毎に右の秘密會合所に參集し密議に加はる者益々多きを加へ、大事到來の機運は彌々切迫した。

◇密書の傳達◇

恁かる內圖らずも今期の西歐大戰は勃發し、軈て土耳其の參戰となるに至つて機は愈熟した、乃ち翁は其一子をして急遽蘭貢に到り密に四圍の狀況を窺はしめ、次いで同地駐紮の土耳其領事アーメッド、マダニー氏に對して一通の密書を傳達せしめた。而して該密書の內容は土耳其の軍艦を新嘉坡に派遣せしめて同地の印度兵と呼應せしめ、海陸一擧にして英國東漸の牙營を屠り、更に大擧して印度本國を席卷せんとしたるもので、密書は翁自ら認めたるものであつたが、之を蘭貢の實

子に送るに際しては書面中別に封筒を絨入し、表記は他人の代筆を乞ふ可く、必ず自己の筆跡を貽し、或は直接土耳其領事館に到つて自らの住所を知られてはならぬ又翁の書面は一讀の後直に火中すべく嚴命した。

讀者よ以上の顚末を語り來るの時翁の顏は頗る得意の色が動いたのであつた。然し乍ら焉んぞ測らん右土耳其領事に宛てた翁の密書は、不幸にして在蘭貢なる英國郵便檢閱官の手によつて押收され、右の大密謀は玆に名殘なく暴露せられた、而して前に記せるが如く翁が固く秘して僕に語れる後、僅々六十餘日目に翁は悲壯なる銃刑の死を遂げた。

◇最後の握手◇

諄々語り訖つて翁は漸く語を收めた、而して徐に調息するかの如く、瞑目暫し默然としてゐたが、最後に喟然として言つた。

『今回の事件は固より私の發案に成れるものであります、然し自分としては尙時期が早いと考へて、切に皆の者を宥めたのでした……が、青年客氣の逝るところ又己を得ずして恁る始末となつた。日本の艦隊は數日前當地を拔錨したばかりで、まだ臺灣の根據地には歸着してゐないのですから、屹度無線電信で呼び返されるに相違ない、印度兵如何に勇猛なりと雖も日本軍に向つては如何ともする事が出來ない……御覽なさい、今に日本の軍艦が急航し來つて陸戰隊を進めます、私は最後に彼等に命じました、投降の已むなきに至つたならば日章旗の下に行けと、嗚呼呪ふべき日英同盟！』

と斯く語つて翁は僕に最後の握手を求めた、折柄卓上無線電信の電鈴が鳴り、倉皇しげなスパークが閃き出した、と見る〳〵翁の顏には包み切れない暗愁の色が漲つた。

◇サラバ東海の友よ！◇

『サラバ東海の友よ、再び相會せんと言ひたけれど汗は蓋らく不可能なるべし。サラバ友よ、日本と印度と其他世界の所有有色人民の上に倖あれ。』

斯く言ひながら彼の手は戰ないた、而して熱い涙が雙頰に溢れ出た。

他は爰に記すまでもない、翁が豫言せるが如く我が第三艦隊は當夜香港冲から急航して引返した、而して日英同盟の義によつて陸戰隊を進發せしめた。英佛露共に同じく各艦から陸戰隊を出したが、何れも散々に擊退されたに抱はらず日章旗隊の向ふ所一發の銃聲さへも聞くに至らず、忽ちにして彼の歷山兵舍は日本軍によつて占領せられた。而して印度兵の大部分は日章旗下に投降したのであつた。

僕は當日翁の邸を辭して歸ると直に英軍の裝甲自動車に迎へられて前線を視察した、それから數日の後叛亂印度兵を一律に銃殺する處へも立會つた。

併し紙數に限りがあるのと、既に其の大要は長田秋濤氏遺稿『圖南錄』に記されたから爰には畧筆する事とし、更に筆を改めて、印度その他に於ける僕の決死的蠻行を物語らう。

第二　馬來半島の虎狩

◇怖ろしき一夜◇

その夜は物凄い暴風雨であつた。

果てしもあらぬ千古の深林が、天を蔽ひ地を掩うて、遠く〳〵連る中に人家と云つては、此處に世を捨て身を棄てゝ、一意專念毒草の研究に餘念なき、ロバート博士の茅屋と、更に一山越えた彼方の藪林にサカイ民族の一小部落があるばかり。しかも其の夜博士の助手數名は毒草採集の爲め遠く旅行した留守中であつて、こゝにゆくりなくも泊り合せた自分と、外に土人のボーイと料理人と主人博士を加へて僅かに四名きりで、其の夜の寂しさつたらないのであつた。

尤も自分達の外に、去年博士が伊太利からつれて來た、セントバアナアド種の犬

が二頭居た。彼等の一族は今尙雪深きアルプスの山中で人命救護の任に從つてゐると云ふ。然るに此兩犬は炎熱常夏の南國に來つて、一向衰へもせず、極めて勇敢に生きつゝある。博士の話によると去年此山中に連れ込んだ時は、迚も生長しまいと思つたが、爾來いろ〳〵と手を盡した甲斐があつて、今では頗る壯健になつた。殊に夜分は涼しいのでなか〳〵猛烈に唸り立てる。何さま世界犬族の王と稱せらるゝだけに、體量二十餘貫と言ふ大の逸物で、力も强く勇氣に富んでゐて、夜中虎の現はれた時などは勢ひ猛に唸り立てる。しかし雄のバアナアドは、數ヶ月前の或る夕方、主人博士の伴をして、山から歸る途中、傷負ひの虎と格鬪して右の一眼を奪はれた。それでも其勇猛なる點に於ては毫も前に異ならず、こゝに幾千里を隔てたる異鄕の山中に雌のリモーを唯一の伴侶として、日夜博士に忠勤を勵げむでゐる。而して自分は其夜の夜中過ぎて間もない頃に俄然として、けたゝましきこの兩犬の叫びに夢を破られた。

◇閃電霹靂◇

今し屋外は物凄い暴風雨である。そして雨の音は急瀨の如く森から森に谺して聞ゆる。魔王の荒れ狂ふやうな嵐の狂喚とそれに枝を折られ幹を碎かるゝ樹木裂帛の悲鳴と、更に裏手に近きドリアンの杜に方つて、怯えたやうな群猿の號びが斷續して聞える。

かくて今附近の森林は不斷の沈默と靜寂の平和を名殘なく破壞され、悲鳴と、怒號と、狂喚の中に、宛ら世の終焉かと思はるゝ極度の騷擾を呈しつゝある。

兎角する中又もや一聲高く、バアナアドの叫びが聞えた。しかも其の號音の中にはたゞならぬ驚愕と憤怒と焦心の氣が漲つてゐる。自分はこの號びを聞くと同時に殆んど無意識にベッドの上に跳ね起きた。と椰子の葉葺の屋根の隙間から劍の如く冴え切つた稻妻が、閃平とベッドの蚊帳に迸つた。しかしてそれと同時に宛ら天

地も崩るゝばかりなる雷鳴が轟いた。しかも其雷名の餘韻が宛も巨濤の打ち寄するが如く森の奥深く響き渡る。

刹那自分の心臓は常になき劇度の鼓動を感じた。而して直覺的に今宵何等かの異變がこの家に起るらしく感じられた。そこで靜かに寢臺の上に端座して暫く呼吸を調へたが、この間バーナード等雌雄は火のつくやうに吠立てる。軈て時の十分も過ぎたと思ふ頃家の横手の雞舍に近い邊りで一聲鋭き虎の號びを耳にした。

◇屋外の騒亂◇

性來冒險癖の強い自分は、此瞬間逝るやうな好奇心に唆られた。そして先刻まで強かに感じてゐた恐怖の念は拭ふが如く消え去つて、例の冒險癖　蹔蹔の如く胸に高鳴るを覺えた。と枕頭の燐寸を掴むや否や轉ぶが如く寢臺から飛び降りた。そしてまづランプに火を點けた。耳欹つれば屋外の騒亂はいよ〳〵たゞならぬ氣配

である。此時自分がまづ何よりも目擊したいと思つたのは、例の猛犬と虎の格闘である。そこで洋袴を窄くと直に用意の拳銃と懐中電燈を携へて、密と細目に扉を開げた。然し屋外は天地混然たる暗澹の闇である。恁くては何と詮方もない。

『おい、オマール君！オマール君』と他家のボーイだけに聊か敬意を表して君附けにボーイを起したが、隣りのボーイ部屋では輕い鼾の聲が漏れて、今やオマール君熟睡の眞最中、と反對に博士の部屋から『ニコラス君ニコラス君』と僕を呼ぶ聲がする。博士とは先年印度旅行中恒河の上流で始めて會つた。そして其の一行と獅子狩まで行つたのだが、爾來博士は僕を呼ぶに何時もニコラス〳〵と露西亞皇帝の名をそのまゝに呼ぶやうになつた。而して幾度か抗議を申込んでも訂正しない。併も其都度辯明すらく『ニシカワ』と發音するのは自分に取つて何よりもむづかしい事であると言ふ。

餘談は姑く擱き、博士もなか〳〵の蠻勇家であるが、眼前猛虎の號びを聞いては

さすがに自分の室の扉を開き得なかつた。そして、

『例の暴君が襲來したらしいがバアナアドは大丈夫だらうか？』と部屋の中から不安らしい聲で質問する。併し僕は此際博士への返辭よりもまづボーイのオマールを起す事が急務と心得た。何となれば先年印度の獅子狩に於て、恐怖しいと云ふものはどんなものかと云つた樣に彼が危急の際に於て極めて勇敢である事を實見したからである。

◇馬鹿野郎◇

其處で自分は破るゝばかり彼の扉を叩いた。

『オマール君早く起きないか、大變だよ』

かく叫びつゝ矢鱈に戸を敲いたが蝦蟇の樣な遲鈍なる神經の所有者は最後に漸くウーンと欠伸をした。

『馬鹿野郎ッ』と僕は思はず日本語で叫んだ。

『アバ、マウ、トワン』(旦那御用ですか。)と彼が寢呆氣眼を擦りつゝ漸く起き出でたのはそれから約十分間の後であつた。

『馬鹿野郎、虎が來たのだ』と覺えず罵聲を浴せたが、オマール君一向腹の立つ風もなく、且つ驚いた色もない。

『リモ？』と言つたが、彼はニヤ〳〵と笑ひ出した。

そして『虎あ俺がハー友達だア。』と云つて笑ひ崩れた。そこで僕も大に腰を折られた。腰を折られて小癪には觸つたが、實際彼は虎の襲擊位何んとも思つてゐないのである。

しかも從前彼は勇猛なる虎と格鬪した尊敬す可き實驗を持つてゐる。

それは今期の戰爭に獨軍が使用して居る毒瓦斯の原料が南米の熱帶地に生える百合科の植物であると言ふ事が判り、博士が英國から來つて此南蠻の山中に、一意專

心之が研究を始めてから、間のない時であつた。或日博士はオマールを伴れて山奥深く毒草の採集に分け入つた。

◇ロバート博士の危難◇

その歸途一頭の猛虎に襲はれた、時は早や日暮に近い頃なので二人は急ぎ足に草萊を分けつゝ歸つてゐた。すると博士の先頭に立てるオマールが突然物をも言はず地に匍匐つた。此時博士は不思議さうに行く手を眺めたが、思ひきや目前七八間の彼方なる巖角に、犢の如き一頭の猛虎が蹲踞まり、驚破や跳びかゝらんとする所であつた。それつと言ふので銃を構へんとしたが、此時疾く右の猛虎は物凄き一聲の唸りをあげつゝ箭の如く博士に向つて殺到したのであつた。然るに此時まで死せるが如く大地に匍匐つて居た例のオマールが、曳と叫んで叩き附けた馬來刀は物の見事に虎の眉間に命中した、そしてさすがの猛虎も其場に絶命した、恁くて二人はこ

ゝに危き命を助かつたのである。當時博士は痛くオマールの沈着と勇氣を歎賞したが、後に至つてそれはオマールのみに限らず、土民の多くが途中虎に襲はれた時に執常套の手段である事を發見した。虎が獲物に向ふ時は決して不用意には飛びかゝらず、必ず蹲踞つて狙ひを定める。そして虛を見て突進するのであるから、彼に狙はれた時は決して逃げてはならぬ、じつと其の場に匍匐つて彼の眸を凝視める。そして彼が跳躍し來るの時其眉間に一擊を與へる。是れ土民が父祖以來實地に行ひ來れる共通の手段であつた。

餘談は擱く、兎角する內博士はコックのタロンにアセチリン探照燈と馬來刀を携へしめ、自分は新式モーゼルの連發銃を携へてヴエランダに跳び出した。續いて僕もオマールに同じ用意をせしめて博士の背後に立つ。

◇決死の護衛◇

雨と風とはいよ〳〵劇しく夜を荒び、二頭の犬はいよ〳〵鋭く吠え立てる、そして探照燈は氣遣し氣に瞬き乍ら、目前數十ヤードの彼方なる犬小舍を照らしてゐる。この時博士は銃を擬して雄々しくも先頭に立つた。そして眞暗な闇と探照燈の接觸地點に狙ひを附けてゐる。

僕は乃ち拳銃の嚢を開いて博士の右側に立つた。すると博士は狙ひ乍らかう言ふのである。

『ニコラス君、君はオマールに馬來刀を持たせ、一度彼の犬小舍を調べさせて貰ひ度い、而して君はピストルを持つてオマールの背後を護衛してくれ給へ、僕は此臺からモーゼルで君等の後を護衛するから！』

と、然しながら此際博士の護衛なるものが頗る以て心細い、心細いと言ふよりも寧ろ護衛さるゝのが一層危險なのである、萬一虎に跳び附かれた時に於て、虎が擊たれると結構なのだか、まかり間違つたら自分達が擊たれねばならぬ、而して銃に對

する博士の技倆なるものが爾く信を置く可き充分なものではないのである。

『諾しい』と即座に應へたものゝ、『併し』と後に繰り出すべき抗議の文句を考へてゐる間に、例の鈍なる勇者オマールは既に早や馬來刀を引つかぶつて階磴を降りつゝある。

君子危きに近寄らずといふが、僕は此際、此山中唯一人なる日本人である、それが卑怯だとか、臆病だとか言はれるのは殘念である。諾し遲れてなるものかと遂に意を決してオマールの背後に續いた。

◇鮮血腥し◇

かくて漸く二人が犬小舍に近寄つて見ると、驚く可し小舍の柵は宛ら鋭利なる刄物を以て穿たれたるが如く掘り取られ、その扉は半外面から押し開かれてゐるのであつた。今一刻の後には愛すべきバーナード等兩個の猛犬と、獰猛極りなき野虎

との大格闘が開始される所であつた。自分達が近附くと二頭の犬は嬉し氣に鳴き乍ら、扉の破れ口に頭を出し耳を振る、僕は隻手でバーナードの頭を撫で乍らキット前面に眼を配つた。

と『オイ君、大丈夫だ、犬が巫獻てゐる所を見ると虎は近くに居ない。』と博士が言ふ『大丈夫。』と僕も應へた。

『ぢや序に雞小舍の方も點檢するかな。』と今度は博士も降りて來る。恁くて四人が雞小舍の前に立つた時、一同はアッとばかり物をも言はず驚きの顏を見合せた。只見る小指太の鐵線で圍れたバンの扉は、恰も彼の電線工夫が鋏を以て斷つたるが如くに搔き破られ、中なる八羽の雞は影も形も見られない。そして後には滾々たる血潮と、血汐に染まれる羽毛の小許を殘すのみであつた。然もまだ醒温き血汐が滴る三和土の上には點々として虎の足痕が印せられてゐた。

◇ロンリース井ート◇

その夜自分達は小舍の周圍に灯を燈し更に篝火を焚いて徹宵警戒した。暴風雨は曉方から漸く止んだが、空は尙鉛の如き雲が蔓つて、四邊の森は巨魔の如く天に暗く聳り立つ。而して靑い月が時々雲の破れ目から顏を出す、天地森沈として人聲を交へず。

『何といふ幽寂味ぞ。』と博士が言ふ。

『俺ア眠くて仕樣が無え。』とオマールが崩れるやうに喞く。

兎角するうち夜は漸く曉けて、ミルク色の霧がしつとりと大地を覆うた。そして森の梢の彼方此方で山鷄が嬉しげに黎明の唄を歌ふ、日本に生れて日本に育つた者は、鷄と言ふものは以前から人家に飼はれてゐるものゝ如く考へるであらうが、熱帶國の山林では今尙日本に於ける雉子や山鳥の如く野生のまゝに生きつゝある。而

してその羽毛も亦極めて美しい。

昨夜虎の爲めに悉皆手飼の鷄を奪はれた自分達は、今朝の食膳に上すべき肉の料として、この山鷄を撃ちに出掛ける事となつた。勿論森は深いので家から三四丁も行けば好いのである、從つて準備と言つても別段の用意もなく、例によつてオマール君が馬來刀を持つて先頭に立ち、徑なき徑を切り拂つて進むのであるが、昨夜、猛虎の襲來にいさゝか臆氣附いた自分は、夜來この山中が甚だ氣味の好くない事を感じてゐる。其處で曾て印度でやつた獅子狩の樣な餘り圖端拔けた冒險は遣らぬ事に決心した。而して博士はと見ると、先生例に依つて平然たるもので、ゆう〳〵葉卷の煙を吹き乍ら、銃を携へてオマールの後に尾いて行く、實を言ふと僕は朝食に鷄肉の御馳走になるよりも、寧ろ此儘賑やかな新嘉坡へ逃げ出し、此處で夜來の命の洗濯をしたいと思つたのである。併し今此處で病と佯つて逃ぐるも卑怯と心得たから嫌々乍ら同行する事となつた。その代り今日は博士に賴んで例の猛犬バアナードとリモーを護衛として隨行せしむる事とした。

◇日本刀◇

特に日本から携へて來た無銘長船の仕込杖と、別に十二連發の自動拳銃を携へたバアナードは體量十三貫餘りの僕を脊上に乘せ、悠然として博士の背後に續く、而して時々リモーが先になつて驅け出すと、切りに口惜しがつて吽と唸る。するとリモーは心得て又後になる。

かくて約三丁ばかり森の奥へ來たと思ふ頃、先頭のオマールが密と振り返つた。そして二十間ばかり彼方なるドリアンの大樹を指しつゝ、

『旦那、彼方に鷄が居ます。』と私語く。成程鷄が居る、矗乎として天を摩せる約十丈の大樹の中間に見るも美しき金色の翼を安め、時に喉を膨らませては啼いてゐる而して博士が將に照尺を測つて火蓋を切らんとすると、オマールがまづ制めた。山

鷄は夜間樹上に眠るが、朝方から日中は樹下蔭を徂徠して、飼を喪るのが常である然るに今彼が遙かに高き樹上にあると、而して其の啼く音に應じて彼方此方から啼き立てる友鷄の聲を聞くと常になく不穩の氣に滿ちてゐる。

『用愼せぬと虎が近くにゐるかも知れない。』と彼は注意した。併し時は夜既に全く曉け放れて東天一抹の紅を潮してゐるのである。

『豈夫今頃こんな近くに虎がゐるものか。』と、博士は容赦なく、狙ひを定めて一發を放つた。すると彈は見事命中して彼方の山鷄はばさりと落ちる。

『締めたッ。』と博士が跳び上ると、心得てリモーが箭の如くそれに突進したが、間もなく彼方に方つて物凄き虎の唸りが起つた。同時にリモーも亦憤怒の號びを擧げた、と今迄柔順に僕を乘せて一行の殿りを承つてゐたバアナアードが、彼のリモーの號びを聞くと等しく脊中に僕を乘せたまゝ一散に彼方へ驅け出した。

今にして白狀するが、僕生れて以來此時位驚いた事はなかつた。待てと言へば

とて頭を打てばとて今や渾身の猛氣を振つて敵に突進せる彼は、一向僕の命令に服從しない。

◇猛虎と猛犬の格鬪◇

疾風の如く森の草萊を駈け拔けて、約十數間の彼方に方り、今やリモーと相對して、將に爪牙を交へんとせる一頭の猛虎を、それと分明に認め得る地點に於て、倖なるかな僕は其場に振り落された。十餘貫の重荷を卸したバアナードは、此時疾く敵の目前に肉迫した。と勢ひを得たるリモーが一聲高く唸ると共に躍然として跳びかゝり、驚破や爪牙相交らんとせる刹那、此方のバアナードは早や件の猛虎の背後に廻つて一咬を虎の臀部に吳れた、すると怒りに怒り、狂ひに狂へる虎は急遽身を轉じてバアナードに咬みかゝると、更にリモーが背後より跳びかゝる。

壯烈と言はんか悽愴と評せんか、死を決せる二頭の巨犬が互に劬り劬はられ跳び

つ躍りつ血に狂へる猛虎と鬪ふ光景は、僕今にして尙渾身の血潮逆流するの思ひあり。

かくて約五分間の格鬪は繼續せられた、畜類乍らも、目前二頭の勇犬が死力を盡して血戰せる狀を眺めては、僕も亦自ら耿々の士氣、勃々の勇氣に驅られざるを得ない、畜生ッと叫び乍ら我を忘れて二三間彼方に突進すると、突如。

『ナンチー、トワン』と叫ぶオマールの聲が聞えた。

『旦那お待ちなせえ。』と言ふ彼が其の言葉の下より、一發の銃聲が突如として僕の背後に起つた。續いて一發、又一發、數發の銃聲が連續して彼方の森に谺して響くと共に、彼の血狂へる猛虎は宛ら電氣に打たれたるが如く、撲乎とばかり其場に倒れた。

* * * * * * *

その後の事は爰に敢て說明する要もあるまい。

斯くてその日の十時頃僕等は茅出度く博士の毒草研究所に凱旋し、狩り得たる山鷄のスープに舌鼓を打つた。而してその鷄肋は當日の殊勳者たるバアナードとリモーに與へられ、猛虎の皮は僕が歸朝の土產となつた。